

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Diary of Hisakatsu Hijikata (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001075

土方久功日記 第6冊

1924年5月26日～11月8日（大正13年）

解 説

この第6冊では、まず、六年会（大正六年に学習院中等科卒業の同窓会）の遠足で、土浦へ行ったことが記されている。参加者は8人。本多正震と久功が幹事だった。朝8時半の汽車で上野を発ち、桜川で船に乗り、子供にかえて皆で1日を楽しんだ。

6月14日、築地小劇場の第1回公演が行われたが、久功はその2日前の12日、「海戦」と「白鳥の歌」の舞台稽古を見ていた。翌13日は招待日だったので、手伝いに行った。そして、17日には、「正面からお客様になって行く。」その日は、「海戦」と「休みの日」を見た。客は8分の入りだったので、「大いに楽観していい」と日記に書いている。その後もしばしば築地小劇場へ行き、ときには友人等を誘って観劇した。久功は、ほぼ総ての公演を見ていた。そして、日記には、その批評が記されている。また、与志から、しばしば芝居の小道具などの製作を頼まれた。

6月19日、学習院同窓生の片柳茂死去の報に接した。ひと月ほど前に会ったばかりだった。同窓生の多くとは、お互いの間に大きなギャップを感じずにはいられないなかで、片柳は少し違っていたので、久功は親しみを感じていた。24日には、追悼の記を日記に書いた。

8月27日の新聞に、二科会の鑑査結果が掲載された。久功は、彫刻2点を出品したが、落選だった。入選は、浅野孟府一人だけだった。日記にははっきりとは記されていないが、だいぶ不満だったようだ。

金に余裕のない久功であったが、コンサートへはよく聴きに行った。その度に日記に、その批評を記した。

当然ながら、展覧会へはよく行っていた。9月3日には、江波智彰への手紙の形で、二科展の出品作について事細かに批評を記している。11月5日の日記には、「最近著しく自然主義的傾向から遠ざかって居る自分には、帝展にあるこれらの自然主義的作品の——否、総括された自然主義の中の区々及びその上下が、どうもはっきりしない。どれもこれも、僅かなものをのぞいては、うまいと思ふ。（これは自分の過去の懐顧^{ママ}から来る同情かも知れない）そのくせどうも興味が持てない。」と書きながらも、5・6日の日記には、帝展（ことに、彫刻について）の批評が、個々の作品について、細かく記されている。

[6] ^{〔表紙〕} 千九百二十四年五月二十六日より 同年十一月八日迄

大正十三年

⑧

^{〔見返し〕}
〔亡父への贈物 久功〕

^{〔扉〕}
〔×を附したるものは別に 原稿紙に書き直したるもの〕

五月二十六日

- 私はあまりに詩が書けないので
つくづくと味気ない思ひで
小さな鉛筆の先をちっとみつめた
鉛筆の先には秘密がある！
私はいつの頃からか、そんなことを信じだした
つくづくと眺める鉛筆の先には
(私はもう疑はない) 確かに秘密がある！

白い紙が雪ともなり、空ともなって
恐ろしい無限へと伸びる
何も見えなくなる
鉛筆の先だけが
雪の上に、空の上に
なまめかしい黒子となって残る
白く冷たい雪の中に
ちかちかと輝く空に
それは赤黒い玉となって燃えはじめる
やがて輪郭がくらへと揺れて消えると
紫の煙が霞のようにひろがってゆく
霞の中から突飛^{あを}な黒馬が飛んで出る
緋の衣をなびかせて朱儒が鞭をふり上げると
金の兜と銀の盾とが触れ合ふところに
二人が疲れきって仆れるところに
おやへ、ふと愛嬌のある慕の目玉
それが生なのか、死なのか
真理か、虚妄か
知りたく、とらへたく
慌しく心を乱す時

雪の上に、空の上に
なまめかしい黒子が一つ残ってゐる……

鉛筆の先には秘密がある
秘密を掘り下げて見ろ
秘密の底の底には何か不思議なものがある
不思議の凝るところに詩がある——
あゝ、若しもこれが詩であるなら！
若しもこれが詩であるなら！²⁶⁴⁾

〔×を附す〕

二十七日

初夏！夕方から青山に本多を訪ねたが、留守なので明治神宮参道を原宿の駅まで散歩、往復する。なか——気持ちいい。

二十八日

わしの唯一の明るい窓に
新らしい沢消硝子に
せからしい蠅め
ぶんぶんといぎたなく
ぶつかってははねっかへる
だがお前はまだしも元気がいい
小さな体をもてあまして
お前はどうかやわしに似た思ひに
苛々と血を焼いてゐるのだらう
随分ぜぜきたない、しつこいお前だが
それでもお前はまともな心をもっている——
だが老耄の蚊蜻蛉め
おどけたらしく
けれどもえたいの知れない蚊蜻蛉め
怪しく不吉な暗示のように……
嬉しいのか、何が嬉しいのか
何をたくらんでゐるのか
何が見えるのか
どんな突飛な

どんな酷らしい運命の糸をつないで来たのか
卑屈な、陰険なその流し目で
そんな露骨な身振で
卑屈な、悪たらしい喜びにぶるへと顫えて――
そこらをやたらと舐りまはっては貰ふまい！

わしにたった一つ許された「望み」を
お前らはどうしようとするのか
それをさへ夢みてはならないのか
それともどっちにしたところで
簡単に「海か山だ」とでも答へる気か

もうつくへといやになったが、仕方がない。動坂から小石川へ行つて来る。晩は川路氏を問うて、「黒子」（一九二四・五・二六）と「のぞき見」（一九二四・二・一八）を日本詩人に投稿する。

○忘れる程のものは
忘れるが――
失ったものは
大きく見え
過ぎ去ったものは
懐しい
あゝ「あれも音」と思ふのは
いつも「今」だ

[×を附す]

二十九日

○急にあたりが真暗になって
木の葉がざわへと騒ぎ出して
大粒の雨が横ざまに
なぐりつけるように縁側を濡らした

うろたへて

ぎし――する新らしい雨戸を引いたが
閉めきったら、はたと静まって
外にはきら――と日がまぶしい

五月の午さがり
とんきよな思ひで雨戸を開けてゐる……

〔×を附す〕

-
- 厠から出て
縁先で手を洗って
かたへの手拭で濡手をふきながら
ふと下を見たが

驚いた蟻めが
ぬれた土のあたりを
どぎまぎとかけずりまはってゐる

かわいた土に
水はみるまに吸はれてしまったが……

〔×を附す〕

(1)

- まっぴるま
生垣の向ふの菜園で声がる
みちこさん――
はい――
みちこさん――
はあい――
思はずくっすり笑ってゐる

(2)

- 声がまたはじめる
みちこさん――
はい――
おしっこ？

はい――

おもらししたの？

……

おや――、それをとってしまって寒くないの？

あゝ、くすぐったい！

くすぐったい風が吹く

[×を附す]

終日家に居て呑気である。

先日買って来た一氏義良氏の「未来派 立体派 表現派」を六七十頁読む。今時逆行論もはやるまい。進化が既に変質である以上、我々は原始に帰ることは無理である。更に只進化があるばかりである。同じ人間などと云ふを止めよ。ブルジョアとプロレタリアートとは、常にありながら、常に互に内容は転換しあつて居るのだ。科学が何処まで進んだと云ふのか。独特性には何んな絶対権があるとでも云ふのか。附属物が存在を拒まれなければならない理由がどこにあるか。本質的な根本的な問題を暫らく措いても、搾取階級と被搾取階級とがなく、此の科学文明が生れたか。そんな科学文明に立脚して、尚原始――所謂原始には已に程度の差、約束の差こそあれ、立派な権勢闘は立派に存在した――を憧憬する矛盾を敢てするのか。すべての存在はそれ自身に何等かの意義があるかないかである。或は有る。或はない。肯定された時にあり、否定された時に無い。徹底するなら、一切空か、一切有かだ。尤も半有半空にした処で、あながち否定しはしないが、撰択の自由を要求するならば、常に反対も亦有り得べきことを認めねばなるまい。目的などと云ふものが、そんなに易々と解せうものではない。只、進化があるのだ。退化だってかまひはしない。言葉の、見方のちがひなのだから、只、変化があればいい。只、変化があればいい。現在でないものへ、現在でないものへ、(過去へなど、決してかへるものではない)。目的は、未来なのだ。変化なのだ。とまれ一氏氏の議論は、議論の爲の議論――これは、一氏氏の最も憎むと云ふものだが――として、却って非常に興味深いものである。

三十日

終日かけずるまはる。石膏屋にレリーフをぬかせる。学校に行つて、^[續二]後藤に逢つて来る。光風会²⁶⁵⁾の展覧会を見る。気持が悪い。会員の横暴さ、卑劣さ、殊に四室、五室あたり、小さな売絵の数々を以て一人二人の会員で室を占領して居る。会員以外の人々は、一室、二室、十室に肩をすばめてぎし――つまって居る。かうした中で、特別展覧のゴーガン

とセガンティニーを見ると、ぐっと見ごたへがする。

午後は音楽学校の大会の総練習を聞く。あまり面白くない。渋谷に出て、本多を尋ね、十時頃家に帰る。ひどく労れてしまふ。

三十一日

終日家に居て、さて何うした日か、終日何にもしない。日は照って居るけれども、何か被かぶさるような日だ。明日の朝が早いので、早く床に就く。

六月

一日 sunday

七時半に上野駅に集る。六年会²⁶⁶⁾の遠足である。安場保国、上原七の助、高橋茂雄、由利正通、久松定武が来る。それに本多正震と自分とが幹事である。八時の汽車で土浦にゆく。一日で日曜日だから、汽車はひどく込み合ふ。皆で我孫子まで立ん棒はいいが、身動きも^{〔豫〕}碌々出来ない。土浦について、予定の如くかし舟屋と云ふかし舟屋を問ひ合はせたが、一艘も舟を得ることが出来ない。で町をぬけて、各自ビールやサイダーを一本づつさげて、桜川²⁶⁷⁾の堤に添ふて下ると、もう昼頃にもなり、弁当が重くなって来る。土手の上に、てんでに腰をおろして昼食。照る程の日も照らない草の上に、ビールを飲んで横になって居ると、立ち上るのも億劫になって了ふ。桜川に添ふて湖水端に出たが、休む処もない。やうやく舟を見つけて出ようとすると、松元泰彦が只一人、船頭に漕がせて舟をかへして来る。汽車を遅れて次の汽車で来たのだ。皆で早速その舟にのりかへて出る。追が気持ちいい。三時半過ぎ舟をすて、四時五十分の汽車で上野にかへる。汽車にのった頃から雨風が吹き出して、細かい雨になる。上野から自動車を飛ばして丸ビルの八階、精養軒の食堂で夕食をとると、やっと落ついた気がする。

二日

^{〔中井〕}
良三郎兄。

御葉書拝見しました。すっかり御無沙汰してしまひました。毎日よく遊んで居るのですがね。作業は随分つらいでせう。けれども生活としては、軍隊生活、殊に野外生活などは、よささうに思へますよ。何故と云って、此頃の僕ときたら、一体何をして居るのかわからないのです。暇なのです。忙がしいのです。

つまり考へが、行為が、散漫として捉へどころがないのです。暇ならば暇なほど忙がしいのです。処で、そんな莫然^{〔漠〕}としたお話はやめにして、そんな僕にもたまさかの気休めはあります。昨日は古い友達等の集りで、土浦に一日ヨタ遠足をして来ました。兎も角、気のおけない人々と気のおけない処に行つて、ヨタの投げっこでもするといふことは、

気がのんびりとします。土浦といふ処は、見るものも何もない所です。筑波山を背被って霞ヶ浦がひらけてゐるところ、地図の上で見ると、なかへよささうな気がしますが、さて行つて見ると、少しもとらへ所のない処です。水はきたないし、眺めは大き過ぎて目に入りません。それでも舟を浮べて、よしきりの声を近々と聞きながら、青々とした葦の間を縫つてゆくと、風は涼しいし、悪い気はしません。舟の上にごろへと豚の仔のようにかさなり合つて、すっかりだらけた気持です。それでも、人の頭を飛びこして、あつちからもこっちからも盛にヨタが飛びかふ所、一寸平生にない思ひです……

.....

午後、江波の処へ行つて、江波をひっぱつてくる。約束によつてサーヂンのサンドウィッチにウィスキーと葡萄酒を出す。晩方、江波と二人で原瀬の家にゆく。

三日

○あゝ、どこもかも――

緑が私には明る過ぎる

例へばひっそりとしたカフェーの

あまりに明るい壁のように……

其の上五月の空模様は

よりどころのない焦心か――

私はいつのまにか、青空に浮ぶ

たった一かけらの雲を、捜さうとしてゐる……

[×を附す]

午後、上野に仏国現代美術展覧会を見に行く。盛り沢山で、さてあまりいいものがない。彫刻は、馬鹿らしく人形じみたものの外は、殆ど全部見た。馬鹿らしく人形じみたものと云ふ謂は、ブローニユの沢山のもののようなのをさすのである。さて、ブルデルと云ふ人のものは、自分はまるで好かない。コンテスのもので、首と腕とがない「踊子」といふのがいいと思った。ドガの一点は、腕と足だけはドガらしい特異な観察を見せては居るが、自分はあの趣味（きれの着物を着せたあたり）には全然反対である。ゴーギャンの二点があったが、小さなもので、殊に木彫の方は、ほんとのカケラに過ぎない。陶製の「小さき像」もあまり面白くない。今度は、マイヨールのものが沢山に見られるのは嬉しい。大きな二つのトルソーもいいが、自分は鉛でぬいた女の首と、二つの「とげ」

とを一番喜んで見た。ポンポンが相変わらず沢山に来て居るが、大したものもない。只一つ、北極熊はすばらしいものである。ロダンはすかない。

絵の方でぼつぼつ見たもの^{の中でおぼえて居るもの}□□□□□□□□□□では、——兎も角大部見慣れてしまったような気がする。ゲランなどは、まるでつまらなくなってしまった。フランドラン、デスパニヤ、ヴラマンク、オットマン、カモアン、ドニー、ルノアールなど目につくけれども、どれもこれもあまりおもしろくない。殊にルノアールなどは、駄目だ。尤も、ルノアールなどはいいものが手に入らないせいもあらうけれども。

ピカール・ル・ブウ、デュフィーの水彩などは、まづ自分の好きな部である。それから、あまり好きだとも云へないが、ピッサローには、何だか感心させられる。ローランサンがたった一枚、しかも小さなつまらないものしか来て居ないのは淋しい。ゴーガンのも、まるで印象派時代の、今から思えば極端にゴーガンらしくない絵ばかり来て居るのもつまらない。カリエールのないのは更に淋しい。この前三つの人体で好きだったバルテレミーが一枚も来て居ないのもものたりない。コッテはひどくいやな色をつかって居る。たった一つ、丁度前にも来たような壺と果物の静物が好きだった。マイヨールのデッサンがそれぞれに皆いい。それから、マチスの「書を読む女」。ドラクロアやシャヴヌあたりは、何うも世界がちがふような気がしてならない。

帰りに松平に行って、石膏をとって来る。

一氏氏の「立体派 未来派 表現派」は、セザンヌ論に入った。そして、後期印象派としてのゴッホ、ゴーガン、ルッソーを論じ終った。セザンヌ論、一氏氏が現代芸術——自己解体に急ぐ過渡芸術の父とするセザンヌは、力を入れて細々と論じられてある。けれども、自分にはいささか退屈だった。返ってゴッホ、ゴーガン、殊にルッソーの簡単な創作批評的な伝記の方が、興味を投げてくれる。

四日

終日曇って蒸々と暑い。午後、^{〔寛〕}三沢を訪ねたが留守だったので、恵比寿まで出て、遠山サンを訪ねる。二時間近く話して、久子さんの写真を二葉貰って、小城サンによってみる。叔父サンの正月命日だったので、子供達も寄宿から帰って来て居た。夕食をすませて、子供達を送りながら帰ろうとする処へ、保ちゃんが菊名から帰って来たので、腰を落着けてしまって、十時に家に帰る。

五日

朝から三沢を訪ね、一緒にアトリエ借用算段と、先づ北村さんの処へ行ったが、普請中で駄目。江波の処で駄弁って建畠サンの処へ行って見たが、ここも普請中。先づあき

らめさせられて、日本橋に出る。皇太子御慶事の市民奉祝日とて、大変な人出だ。鴻の巣で落ついて、大変な電車でゆられて、十二時過ぎ、家に帰る。

○ 郊外の夜はさびれてゐた

夜も遅く十二時前
六月の雨が夢のように降ってゐた
私は暗い道を傘も持たず
少しは急ぎ心地で歩いてゐた
ふと遠い薄明りに浮んで
私の行手に黒い影がさしてゐる
影はゆっくりゆっくり動いた
ちぎに私はほど近くその後に追いついてゐた
私は夜目にもその静かな影を確かめ得た
一人の若者が右手に傘をひろげ
左脇にか細い少女の肩をしっかりと抱きしめて……
二人は決してふりむいて私を見なかったけれども
若者の声があやしく顫へて云った
「右ですか、左ですか」
女の小さな声が「右」と云った
岐路を
影は静かに右へ動いた
あゝ、それ故私は暗い夜道を左へと折れた²⁶⁸⁾

〔×を附す〕

六日
〔湯地〕
孝兄……
……………

処で先日は、逢へるかと思って半分位期待して居たが、やっぱりやって来なかったな。
創作欲旺盛の由、結構に思ふ。早く盛に発表せられんことを望む。

僕も亦、製作欲旺盛（尤も僕の製作欲は、常々絶えず持ち合はせてゐるのだが、僕の経済状態は、適宜以上に過度の勉強から僕を救ってくれるのだ）。ちと勉強しようと思つて、アトリエ借用算段に昨日一日をかけずりまはったが、おもはしくなく、ままよと夜の日本橋の景気を見に出たが、実にたいしたものだった。僕は、東京にあんなに人が居るとは思はなかった。絶えず花火が上る。提灯行列のあふれが五六人づゝかたまって

景気をつけてゐる。カフェーでは、美髯の紳士が正態もなく、声でない叫びで演説してゐる。

諸君、諸君。アメリカが何だ、アメリカか、ハハ……大和魂！やっつけるんだ。かまふものか。やっつけるんだ。おい青年、何だ！俺のような年寄にばかり喋らせて置きやがって。今の青年等はみんな去勢されてゐる奴ばかりだ。何うだ、誰か、キンタマだぞ！アメリカが何だ……。

テーブルが泣く、コップが踊る。奉祝といふものは、乱暴なものだと思った。帰りの電車掠奪戦には、更に驚いた……

七日

実に不愉快に曇って居る。晩に関口氏が来たので、一緒に渋谷に出て、兄と落ち合ひ、のんでしまつて、電車がなくなつてしまったので、関口氏と歩いて四谷の育英舎に行つて宿つてしまふ。夜中になって雨。

八日 sunday

雨は止んだが、雲はどかない。午前、関口氏と別れて家に帰る。梅子叔母様が昌道をつれて来て居られる。日暮方、一時明るい日が照つたが、夜はひっそりとして寒い。

九日

頭も決してよくないが、体も亦よくないようである。勞れて居るのか、意志がない。夢は更に稀にやってくる。情熱がない。実行力は更に乏しい。眠つたような日が二週間の余も続く。

○ 誰か！

せめては俺を怒らせてくれ

あゝ、死んだような無為が続くよりは！

全くだ

やうやく濃くなろうとする緑が

六月の日なかにうろうろする

気まぐれなこの寒い風に

ひろひろと力なく揺れたりされては！

曇日、曇日

何を求める為に、自分は

毎日この灰色の空を見つめねばならないのか

かつては俺も静かな心で
こんな沈黙に耳をかたむけたものだった
かつては俺も若々しい心で
清らかな少女の微笑にうろたへたものだった
だがそれも昔のことだ

誰か！

せめては俺を怒らせてくれ

(わけもない)

俺の前に立塞がって

例へば、こんな風に云ってくれればいいのだ

「こんにちは、静かな日が続きますね」

言ってみろ！

俺は真青になって

おゝ、怒りにふるへて自分の書齋に逃げ帰って来る

俺はインキ壺が何か

最初に手にふれた何物をでも投げつ^{〔け力〕}やてやる

狂暴な血にちょっと火をつ^{〔け力〕}やてやるのだ

次々に厚い本を 置物を

俺の手に触れる程のものを投げつけてやる

髪をむしり 歯を喰ひしばって

床も割れよと踏みならしてやる

椅子でも机でも

俺の足に触れて飛んだものがあつたら

それは俺が蹴っ飛ばしたのだ

物と物とがいがみ合ふにつれて

硝子はわれるだらう

俺の息ははづむだらう

音といふ音が乱れ狂ふだらう……

そこで俺は自分にきいてやるのだ

恋とは何だ

真実とは何だ

生とは何だ

お前は「目的」を見たことがあるか

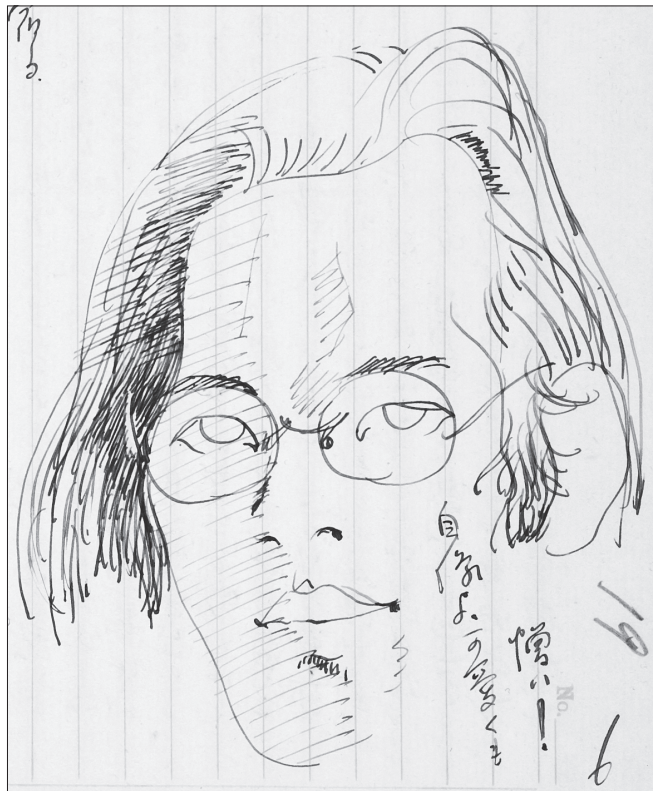
お前は「結果」に満足したことがあるか

お前は「希望」を信じたことがあるか
つまり斯うなのだ
お前と紙屑との間にどれだけの相違があるのか！

嵐が行ってしまって
俺は疲れきってそこらに腰を下すだらう
俺の手から足から生々しい血が流れるのを見たら
俺はそれでも言うてやるつもりだ
「何もなかったよりは退屈しないですんだ」と

[×を附す]

昨日、三沢をすっばかしたので、昼前に学校に行ったが、来て居ない。小室と仏蘭西美術を見て、帰途新大久保で降りて三沢の処を訪ねたが、国へかへってしまって居なかった。夕方、文ちゃん来る。宿る。



自画像（自像よ、可愛くも憎い!）

十日

曇り。

終日家に居たので、又、一氏氏の「未来派 立体派 表現派」を読む。第四編に入
て、「野獸群」から説き出して、マチス、^{〔ママ〕}デランを中心に「二十世紀のはじめ」から「ピ
カソの立体派運動」へと、そして「立体派の理論と実際」へと、極めて親切に（全くく
どいほどに）説き下されて居る。だが相変わらず退屈させられる。何故なら、純然たる絵
画史でもなく、純然たる美学的批評でもなく（偏陂でも全然又趣味的観賞ならば、まづ
面白みもあるけれども）、変な社会問題と結びつけて、新らしさうな結末へと導かれる
からである。そしてそれが自分の解釈から離れても居るし、馬鹿げても見えるからであ
る。例へば斯うである。〔ピカソ等が、社会といふ唯一で絶対であるべき現実にぶつか
らずして、その一つ手前である「芸術」の仮現を映画幕として、それに仮像を写して満
足してゐることに物足らなさを感じる。それをつき破って、実行そのものに面接し迫進
しないところに生ぬるさを感じる。……

何故同じ精神が、かれらの生活その物に向って働きかけないであらうか？ 現に未来
派は、そこへ向って突進したではないか？ 表現派のある人たちは、もっと――本質的に
人間生活そのものへ徹底し、肉薄して居るのではないか？]

何故、一氏氏は、遮二無二「芸術」を社会運動へ結びつけずに居られないのか。芸術
がなくても、社会運動^{〔欄外に記す〕}〔生活運動〕は立派に出来るのだ。若しも一氏氏が、社会運動の
みに「人間」の価値と意義とを絶対に任せるのならば、又何を以て芸術家などと云ふ名
前を認め、又その芸術家などを問題とするのか。自分の考へでは、芸術はやはり人間の
余^{〔裕〕}猶から生れたものと思ふ。少くとも「猿の人」「曙の人」時代には、芸術はなかった
かも知れない。けれども有史以後は已にあり、而して今も亦あるのだ。これは大きな問
題だ。我々が「猿の人」「曙の人」に帰ることが出来ないと同じ程度に、芸術絶滅は不
可能事に思はれる。そこで今一つ、一氏氏は云ふ。〔そのために面と面と、線と線とは、
主観のまゝに変ぜられ、あるひは倒され、あるいは横ざまに、或は裏向けに置かれるこ
ととなった。もちろん必ずしも物象の表現は、その実物に似て居ない。誇張も省略も、
部分の極微描写も、故意の変形も、自由自在に行はれてゐるのだ〕そこで自分の考へで
は、それは何も少しも社会運動の為でも何でもない。只偶然か必然かに並行して進んだ
までである。表現主義者の中に、又立体派の中にヴィジョンニストが居ることは少しも
不思議はない。只未来派は、その本然に於て、已に運動の為の運動として出発した故に、
ヴィジョンニストである筈がなく、^{〔ママ〕}ダダイストは又特殊な状況の下に変質的に芽ばえた
もの故に、又極めて現実暴露的な分子を多分に含んで居る。

けれども又見よ。自称未来派、ダダイストの人々が、如何に平気でヴィジョンを追求
して居る現状よ！ 彼等こそは、芸術を根本的に否定してもいい人々なのである。又芸術
が理智的になり、科学的になった故に、自己解体に進みつつあると断定するのも考へも

のである。自分の考へでは、偶々科学が時代人にとって常識的に普及し、理智に覚めた時代人が古い伝統にあきたらずして、新しい道を幾つか見出したのである。そこで、対象は広められ、科学的な頭悩^{〔脳〕}は当然エッセンシャルな色彩、線、調子、構造等の自由なる駆使によって、或るエフェクトに至達^{〔到カ〕}することに成功したのである。偶々ひんまがった線の中に、再現的な形が見出された処で〔実物に似て居ない〕などと云ふよりは、我々の視覚経験乃至衝動が、我等に日常親みのある、例へば壺とか机とか、人間とからしい形を描かせたと見るべきである。何故なら、画家は今、人間の形を画かうとして居るのではない。それを以て何かを描かうとするのだから。尚我々は造形芸術に接して、決して科学の如何なる本にも見出さない処の感情を呼びおこすのである。これは如何に科学的であっても、猶芸術は科学ではないことを思はせる。只、伝統が破られ、基準が乱れた今日、芸術の価値が全然個人的になったことは疑はれない。趣味性が残るだけだから。芸術なるものは、所詮ブルジョアの所産であつたにしろ、恐らくは、尚も尚も存在するであらう。

晩になって、江波が原瀬を引張って来る。十一時まで喋^{〔ママ〕}ってゆく。晩が雨が降り出したが、長くも降らずに止んだ。

十一日

曇って、暗くって、寒い。

夕方、江波を尋ね、一緒に原瀬の処へ行く。

(序に代ふる詞) (展覧会片^{びら})

○さあ、さあ、皆さん

ここに置物が沢山ならべてあります

悲しい心できざんだもの

嬉しい思ひで描いたもの

物好きと気まぐれで拵りだしたものには

風変りで珍らしいのがあります

皮肉なものあれば、剽軽な奴も居ります

気取ったもの、洒落たもの

たまに真面目くさって怒ったものや

ひどくひねくれて考へこんだもの

しみttれたものや、きたならしいものには

皆さんも退屈なさるかも知れません
随分気味の悪いのもあるかも知れませんが
それにしたところで、お怒り下さったり
さしでがましく御抗議下さることはないと思ひます
それどころか
ここにあるものは他人がやってゐる
云はば道化芝居でございます
一緒になって
泣いたり笑ったりして下さるのも御愛嬌
結句いいお慰みかも知れません
なぜなら、悲しみにしたところで
有頂天な馬鹿喜びにしたところで
つまり他人のものなのです
それだからこそ
どこかにのんきなところもあります
それは、他人のものだからとて
そこにやるせない涙や
堪へられない嘆きでもみつけだして
慎ましくうなだれて下さったところで
それをお止め申すつもりはありません
或は他人の怒りに御同情下さって
青くなってお怒り下さっても
はたの誰彼にやつあたりでもなさらないかぎりは
「つまらない、無駄なことでございます」と
強いて御忠告申さう考へも持ち合はせません
そこでつづめて申せば斯うなのです
さあさあここに
他人の苦しみと悲しみがあります
他人の喜びと自惚があります
も一度申し上げますが
これは他人のものでございます
そこでこの中に
あなた方のお心に応ふものがありましたなら
お気に入りの品がみつかりましたなら
(癪に障るもの、つまらないもの

なんともないものがありましたなら
 横目でも使って行き過ぎて頂きます)
 涙をでも、笑ひをでも、センチメントをでも
 或はとびはなれてグロテスクネスをでも
 遠慮なく御享楽下さるようと
 お勧め致したいのでございます

十二日

曇日、寒い。終日空は一樣に黙りこんで、時間を失くして了ふ。朝の八時も夕べの六時も、只同じ灰色である。終日が只空間的な一灰色であり、只（夜でない処の一つの昼）である。そして時折その「昼」が夜のように暗くなると、糸のような雨が臆病らしく降り続ける。

朝から神田に出、上野に、学校に一寸よって、動坂に行き、小石川へゆき、梅サンと築地の劇場へ行く。舞台稽古を見る。海戦²⁶⁹⁾と白鳥の歌²⁷⁰⁾とを見て、遅くなりさうなので、エミール・マゾーの休みの日²⁷¹⁾だけ見ないで帰って来る。十二時前。

[欄外に記す]
 [毎日毎日]

灰色の、灰色の空のもと
 [難カ]
 糖のような小雨にけふる
 あまりに仄かな栗の花です

あゝ、梅雨時の毎日
 (永い永い単調な毎日です)
 一切の意志が労れはて
 ぼろへと
 一切の望がこぼたれ、腐れ
 いやらしい、貧乏たらしい諦の蔭に
 あゝ、あまりに仄かな栗の花です]

[×を附す]

十三日

まだ――太陽は決して雲を散らさない。曇ってじめ――と寒い。半日室に居て震へて居たが、午後からは築地小劇場へ出かけて行く。今日が招待日だったので、何かと用がある。で自分は裏にばかり居て、芝居は見ない。晩、一時間余驟雨がやって来たが、遅く十二時前、家に帰る頃には止んで居た。

十四日

どうやら晴れた。午前中、石膏屋がきて、型をとって行った。午後、音楽学校の土曜演奏会に行く。たいした出色もない。

憎しみよ――

人が反抗に燃える時程

わなわなと高い情熱はない

――現代の波は自他の転換

対称の換置にめまぐるしく狂奔する

されば憎しみよ、侮蔑よ

羞耻よ

降れ！

降って自分の全霊を血塗れ

すれば自分は汝の血の油を焚いて

殉教者の空虚な喜び

――その趣味はよくない

――けれどもかまふものか

反逆の有頂天の喜び

自卑の祭礼の

驕慢の会式の血祭に捧げ

身を裂き

焰となって天に昇り

灰となって地にしがみつ

彼処に立衝き

此処に王者の虚威を喜びたいのだ……

〔×を附す〕

十五日

午前に川路氏を訪ねたが、旅行に出られて会へなかった。午後は家にとじこもって居たが、さて何もしなかった。晴れては居たが、午後は時たま魔がさすように雲がさした。そして、夜九時にはとうへ雨が降って居る。

どうもあまり浸りこんで読む気がしないので長くなったが、一氏氏の「立体派 未来派 表現派」は、愈々本論に入って、先達立体派の半分程まで行ったが、今日は立体派を終へて、未来派が細々と解かれた。「過程」として、「推移」としてなかへ面白くなつては来た。けれども、理論としては、あまりに分りきって古めかしいし、其上一氏氏の独特の変な結論に引張られるので、折角の面白さが興さめる。例へば、カンディンスキーを論じて、斯う結論する。〔要するに、かれは神秘的精神主義者であり、同時に芸術至上主義者である点に於て、根柢的に現代意識にめざめてゐるとは云へない。だから、かれは科学を排斥しながら、肉体的刺激を高調し、むしろそのみにかかづらひ、そして色彩に関するかれ一流の科学的方式を立てたりなどしてゐるのだ。そして、いかに直感と科学と芸術との三つが、新らしき現実主義と主観主義との上に立つて、おのへの職分を批判せられねばならないか、そしてその背景として、如何なる現代人の精神が働かねばならないかといふ、最も大切なことに於て、非現代の立場にある〕。一氏氏は誰かが非常に多方面に發展してゆく斯界に、一つの新しい主張を提出すると、一氏はそれを直ちに氏独特の、真に不思議な「現代」と対立させては蹴落して進んでゆく。即ち一氏は、特殊な立場を一々否定すべく、氏自身は平気で極めて特殊な立場を持してゐるのである。

「徹底といふことはない！」これが唯一つの徹底である。そしてそこに撰択が残される。撰択は自由である。主観主義、それは已にあまりに現代的ではない。客観の為の客観主義の次に、主観の為の主観主義が過ぎようとして居る。我々は、それが未来派の「運動」に終つたのを見た。自由なる主観の上に建説される客観こそ、来るべき已に^{〔設〕}来て居る現代である。主観は主体そのものが持つものである。主体をはなれて産み出されたものには、已に已に客観性が付随して居るのだ。我々是我々の主観を表現するにあたって、極めて惻巧にこの客観性を利用するのだ。印象派の人々が僅かに息づいて居ることは、彼等主体が自ら主観を持って居たからだ。我々は自由に客観の行きづまりから、主観の行きづまりまでの間に、我々の主趣を見出すのだ。上下が完全にふみにじられた後にも、好悪は立派に存続する。

十六日

一氏氏の本は、やっと終つた。表現派とそれからタダの簡単な説明で、随分俄慢して^{〔我〕}

読んだのだけれども、亦面白くもあった。出だしから、芸術否定を目的とするかの如く説かれて来たのが、愈々の最後に至って、何等主張らしい主張もなく終ってしまったことは、物足りない気がする。こんなことならば、何が故にあんな妙な趣味を徹頭徹尾ひっかけて来たのか。自己の超絶したらしい態度をカンバンにするとより思へない。猶更悪い趣味である。

晴れ、午後驟雨。終日家に居て、何にもしない。

十七日

晴、後、雨。

夕方から、築地小劇場に行く。今日は、正面からお客様になって行く。海戦。役者が慣れたのか、自分が聞き慣れたのか、台詞がよく通る。ムキになり過ぎてしまった為か、アクセントがはっきりしない。全体の調子が思ひきって高くなってしまっている、クライマックスが響かない。電気がもれるので、ホリゾントを見せないように黒幕を下して了ってある。で前のを知ってゐて見ると、大変に暗くなったように思はれるけれども、かなりまでうまくいってゐた。只折角の処で、一度変な光を入れてしまったのは、惜しかった。全体の意気はよく出て居る。全体が一つのマスとして常に動くあたりは、非常によくまとまってゐる。一寸外の芝居に見ない所だ。秋田雨雀²⁷²⁾氏と話しこんでしまって、白鳥の歌は見ないでしまった。休みの日は、いつでも時間が行違ったりして、^{〔ママ〕}稽古一度見て居ないので、今日がはじめてだ。仏蘭西式の瀟洒とした軽いものだが、小堀²⁷³⁾、汐見²⁷⁴⁾氏の芸によって、極めてうまく演ぜられた。

お客もなかへ多く、八分強は確かに入って居る。この調子ならば、大いに楽観していい。

^{〔欄外に記す〕}
[← 《片柳茂²⁷⁵⁾逝去》]

十八日

曇、晩方豪雨。午後から築地に手伝ひに行く。十一時半家に帰る頃には雨もやんで、朧な満月が照ったり戻ったりして居る。

十九日

久々で見る晴天である。午後石膏屋へ行き、先日之二つを持って江波の処へ行く。夕方帰ると、讓二叔父様が来て居られる。十一時頃まで遊んでゆかれた。

十七日に片柳茂がなくなった報知に接する。先月十四日、本多の処で逢った時、片柳は皆の真中に座った。また終始黙って居た。自分も古い友達、けれども、今はもうお互の間に大きなギャップを感じずには居られない友達の中で、多くを語らなかった。今そんな事が何だか気にかかるように、今日の告別式に出ることが出来なかったことが悲し

二十二日 sunday

晴，曇，小雨。午後江波を尋ね，夕方から，築地小劇場に行く。「白鳥の歌」「狼²⁷⁶⁾」

頭が馬鹿になって居る。体が馬鹿になって居る。主張がない。不満がない。まとまりがない。其の上理解がないから，興味がない。

二十三日

先づ，体がよくない。ちっとして居られないで，さて，動くことが出来ない。怪しげな天気，午後には大変な風になる。荒れ狂ふ姿には惚れ――するものがあるけれども，空には不断に黒い不安がかかる。夕方風の中を散歩して来る。体の具合はいくらかい。

二十四日

晴，風，ひどく暑い。

(故 片柳茂に)

逝け 友よ

僕には何のかかはりもない

一つの命と他の命との間に，何かかかはりがあるとすれば

おゝ，それは争闘でなくて何だ

僕は恋の華やかさを知って居る

僕は友情の，愛の優しさを

僕等の生活様式から必然に生れる

あらゆる相互の調和的交渉を知って居る

けれどもそれらは

互の相関を^{〔複〕}複雑にする装飾でなくて何であらう

例へばより強きものよりも

より弱きものがどんなにか残忍であるように

より野蛮なるものよりも

より文明なるものが何んなにか卑劣であるように

斯くして争闘は飾られ，豊かにせられ

あらゆる^{〔複〕}複雑の中に

あらゆる技巧の中に

より華々しく、より酷たらしく
その本然を強調せられる
あゝ、けれども亦
それは何たる悲壮美であらうぞ

逝け 友よ
一つの命が他の命にかかはる
ほんの小さな事実はこれだけだ
とまれ僕は敢て運命に逆ふことなく
この悲壮な人生を
更に華々しく飾る為に、富ましめる為に
猶も新しい友を見出すであらう
あゝ、けれども今、僕の思出の中に
君の姿が
どんなに静かに、どんなに慕はしくなったことか
君はよく黙ってゐた
細い、糸のような君の眼が
今僕の前に極めて暗示的な微笑をなげかける
僕はまだ――生きるだらう
けれども僕は
あゝ、死と僕とを隔ててゐた何物かが
段々に薄らいでゆくのを感じる
それは僕の持つてゐる自他の転換の
主客の転位の
あまりに微妙な感性にひた――と触れてくる
一切生の種々相の総計が死であるならば
所詮死は生者に対してのみ死であるならば
僕は生にある間最も死に近いであらうよ

逝け 友よ
現実には華々しく酷いものだ
運命は無から生れてあらゆる悪戯を弄ぶしぶとい力だ
人生は運命の錦を織り継ぐ細い糸だ
そして死は所詮生者に対しての死だ
それならば

では逝け
僕には何のかかはりもない
僕は勇ましく
暫らく華々しい争闘を続ける
身を以て、夢中になって
あてのない乱舞を踊りぬいて来るぞ
それは楽しいことではない
けれども華々しく勢のいいものだ
だが片柳！君は死んだのか
再び決して僕の前に笑ふことはないのか
それで——何の間違ひもないのか
「約束」だったのか
「事実」とは何か
死とはそんな簡単なものなのか
答へるな！云ってくれないでもいい
僕には、兎も角も僕には
生きると云ふことは勢のいいことなのだから……

君はよく黙って居た——
いつも細い糸のような君の目が柔らかに笑った
今、消えてゆく空虚な僕の姿の上に
死んだ君の微笑が
あゝ、友情が、さんぜんと輝きまさるのを
僕の目は、胸は、せつない痛みで慰めてゐる

〔×を附す〕

二十五日

晴，曇。朝，三沢を尋ねて一緒に学校に行き，夕方から築地にゆく。狼だけ見る。

二十六日

寒い。約束通り，三沢が来てくれる。石膏もぬいて呉れる。午後一緒に，一時間ほど散歩する。曇って居たが，夕方前小雨。音もなく降る。労れてゐる。

二十八日

午後，音楽学校の学友会の大会に行く。混声合唱を久々で愉快地聞いた。殊に，最後

のケルビーニの臨終の弥撒は堂々たる大合唱だ。高村周子氏のヴァイオリン独奏は、ローデのコンチェルト八番の第一楽章で曲をよく知って居たからでもあるが、興味を以て聞いた。よかった。

鳥居忠五郎氏のなさないテノールは、気の毒。

浅野サンが出るので楽しみにして行つたが、なかへうまい。もう少し声量があったらば、何んなにいいだらうと思ふ。いつもピアノはあまり面白く聞いたことがないが、今日の山田菊江氏、境進氏の両方とも、わり合によかった。

二十九日

「赤ンぼが泣く」(一九二三.三.一二.)及び「薄闇」(一九二三.八.一七)二篇を日本詩人に投稿する。

或時私は女の膝に抱かれて居た

(其時私はほんの子供だった)

女は私の頬にぴったりと

彼女の暖かい頬を寄せて

まるで珍らしいおもちゃでもあるように

私の小さな手を飽かず弄んだ

私は思ひ出す、思ひ出す

女を

あゝ、彼女等が今、私に

どんなに懐かしいものとなったか――

〔×を附す〕

午前中、日暮里に出て倉沢の処を尋ねたが、居ないので、そのまゝ宮崎に行ってモデルをさがしたが、結局ちっともいいのが居ない。で誰もたのまない。来週また行く事にする。宮崎で倉沢に会って、一緒に家にひっぱって来る。夕食後、一処に築地小劇場に行く。海戦はすっかり変って居る。黒幕を止めて、又ホリゾントを出し、暗い深い空を表はすようにしてある。幕切の処は、ホリゾントの下の方から真紅の光を投げて、最後に残される二人は、その赤い光の前に、骸骨のような影絵となる。小堀氏のワシリーは、汐見氏のにくらべて非常に細かく動く。その一つ一つの技巧は(それは何だか、或る型を遂ふようには見えるけれども)、実にうまい。けれども自分は、あの云はば一人芝居

を一機に大づかみに流すように貫ぬいて行く汐見氏の方をとる。写実味から見るならば、小堀氏のは、始めから終りまで、酔ったままのワシリーがよく出て居る。汐見氏の方のは、高調に登って行く時には已に酔から覚めて了って、只とりとめのない、あぶなっかしい「爺サン」だけが残る。これは、両方とも有り得ることだ。小堀氏のは、極めて自然である。けれども、若しもそこに無理がなく演ぜられるならば、汐見氏のような方が力強く自分には思はれる。

三十日

近いうちに、築地でヒルシュフェルドの「死せる生」が上演されることになって居るので、読んで見る。全く忘れてしまつて居た。読んでみて、忘れてゐた筈だと思ふ。こんな作が三年前の自分に何の印象もきざまなかつたことはあたり前だ。自分は今、此処に、この内容を批判しようとは思はない。只上演されることを予想するならば、恐らくこれはひどく人を退屈させるだらう。これは劇ではない。対話だ。而も作者が考へて考へて作った対話だ。こんな対話をのべたらに続けられて、傍聴して、共に考へ、それに追着いてゆく事なんか、誰にだって出来やしない。これは劇ではない。これは詩だ。而も朗読して聞かせらるべき詩ではない。味はふべき、共に考へるべき哲学詩だ。とまれこの上演は退屈なものに終るだらう。

極めて暗示的な台詞の連続である。^{〔ママ〕}それも、メーテルリンクのような暗示とは違つて——メーテルリンクは極めて平易な、見えるもの、聞こえるもの、触れるもの、さうい^{〔漢〕}った我々に卑近なものをどん——取入れる。これは、同じ莫然とながらも我々に早くそれらを受入れさせる。これは上演に際して、台詞がどん——進行してゆくような場合には、極めて必要なことのように思はれる——。あまりに言葉で、あまりに抽象的である。例へば、「海戦」の第一と第五の水兵の対話のところだけを演ずるようなことになりはしないか。若しこれをしも劇的に効果あらしめる為には、役者の極めて微妙な表情と観者の極めて鋭い感受性にまたなければならない。而もこれは役者にとつても非常な重荷であり、観者にとつても非常な忍耐努力を強ひられることだ。其上役者と観者とが斯く完全であつた処で、双方の不慣から^{〔欄外に記す〕}「表現と解釈との間に」双方の間に、とんでもないギャップが出来るとな事は、極めて容易に考へられる。若しそんなことになれば、観者は同じように退屈しなければならない。

夕方から、小石川へ行く。^{〔愛子〕}叔母様の処で夕食を頂いて、十二時前に帰つて来る。

七月

一日

^{〔柴山琴子〕}祖母様の三年祭なので、型ばかり墓前祭を行ふ。自分と讓^{〔本田〕}二叔父様だけ、叔母様達と一緒に鎌倉に行く。宿る。

二日

湯地を訪ねる。午後、湯地と海岸の方を散歩する。

三日

茅ヶ崎へ父上のお墓詣りをする。地震後手も入れない父上の墓は、実に荒れはてて居る。墓石は倒れ落ちたままになって居る。いつもながら、竹だの雑草が伸び放題にのびひろがって、身を以て別け入らねばならない。だが自分は、ここでは一切の自分を解剖することをやめる。お末お婆さんの処へ行ってくる。照子も寝て居る程のこともないようである。三時六分の汽車で東京に帰ってくる。

四日

原瀬を訪ね、午後一緒に音楽学校にバルダスの独奏を聞きにゆく。それから、築地へ――

○ いつも黄色い酒を通して見る

お前の顔はほどよく歪んで

媚びやかな微笑を投げる

やたらと叩きつけた白粉が

荒みきったお前の皮膚を、現実を

優しく裏に庇ってくれる

お前はいつも礼節正しく

黄色い酒が程よく私を包む頃を待って

慎ましく私に近寄ってくる

「どうしてお前はそんなにも可愛いのだらう」

「嘘でも何でも嬉しいわ、私嬉しいわ!」

おゝ、だがお前の目は、その輝きは!

あゝ、詩人よ
私がたわいのない嘘を弄んでゐる間に
お前は嘘の上に立派な真実を築き上げる

かくて私が、私に値しない
あまりに高い真実を果なむ時に
次々に続く嘘に苛立つ時に

かくてお前は只一夜毎に
幾つの真実に喜び顫え
幾つの真実を涙して泣くのだ

あゝ、今宵黄色い酒を通して
お前が教へてくれた真実よ、詩よ
仮面よ、嘘よ――

[×を附す]

五日
快晴、快暑。夜、神田まで出る。

六日
晴。朝のうち、小石川へ行く。快くむう――と暑い。
梅子叔母様が午後出て来られ、晩まで遊んで行かれる。

○真夏の
(夢ではない!) 蔭もない
真昼の散策である

真直な日が照ってゐる
行く処 行く処
隅までも明るい真昼の外景である
白い道が続く
一足一足、細かい焼土がぽつぽつとけぶり

思へ！^{あなうら} 足裏に柔らかい熱気を
二つの唇の間に 燃える焰か
三つの視角が相撃つ敵意
異常な情圧である
空を見ろ
樹を見ろ
百千層の水蒸気を重く透かせて
焦色の必死の沈黙を守って
空の下に 樹の蔭に
重黒い汗を吹く風——生温い鬱気を
わが膚を噛み
わが血を舐る非情の好感である
おゝ、 いっぱいの日
一面の乱射乱光を浴びて
茲に感ずる生
登りつめた高潮を被ふ
只一重、外皮の平静
底知れぬ単調
無情に似る極情の——

(夢ではない！)
真夏の、むう——と暑い
真昼の散策である

〔×を附す〕

七日

晴。午後、森サンが来て、夕方前まで居る。

八日

- 隣りのミチコサンの大変な泣き方です
昼日中、前のオバサマのとんきよな大声です
「ミチコサン、何を笑っていらっしゃるの」
ミチコサンのぱったり泣き止んだ不思議です

[欄外に記す]
[スケッチ]

[×を附す]

晩は築地に行く。

十日

夕方、高円寺駅の方を散歩して来る。ちっともいいことはない。帰って来ると間もなく、江波と原瀬とが遊びに来る。

丁度去年の夏手をつけて、九月の地震で目茶へ〜になってしまった「或る男の手記」。そのちぐはぐな原稿が出て来たので、二三日前から立直してやってゐるが、まだ〜先は見えない。も一つ「気のきかない風景」を書きはじめたけれども、これはまだ半分で已にくだらなさが目に見えて来る。けれども、いつも中途はんばな事ばかりして居る償ひとして、今度はまとめるだけでも、まとめてみよう決心でゐる。

十一日

午後から築地小劇場の舞台稽古を見に行く。ひどく遅くなってしまったので、小石川へ行って宿る。(人造人間²⁷⁷⁾)

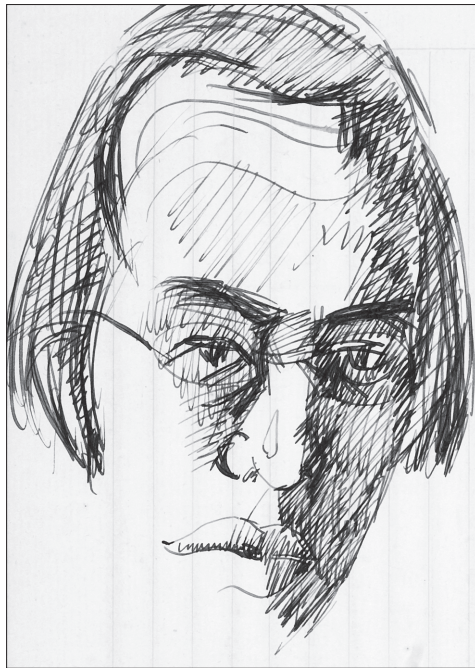
十二日

学校へまはり、江波を尋ね、夕方家に帰る。夕食後散歩し、上原サンの処へ行って十時過ぎまで涼んでくる。

十三日 sunday

毎日よく晴れて暑い。白い日がかん〜照るので、気持ちがいい。白が埃ってポク〜足が埋まるのには、気持ちよりも靴とズボンがたまらない。朝から原瀬を尋ねて、三時前に帰って来る。

何うも続く日も続く日も、刺戟がなくていけない。美しいにしろ、苦々しいにしろ、刺戟が自分には絶対に必要だ。何しろこの半月の何にもなかったことは、驚くべきものである。また〜思ひきってとっぴなものがほしくなった。



自画像

十四日

昨日が自分の誕生日だったが、日曜日で誰も居なかったので、今日夕方から東中野の新箱根に晩飯を食べに行く。

十五日

全く何日ぶりで雨が降ったことだらう。それも非常な雨量と勢とを以て、午後半日、驟雨のべつにやって来ては過ぎたのである。お蔭で、夕べの風はめっきり冷々してゐる。「気のきかない風景」は、出来上った。僅か十二枚の小さなものだが、それから始めの計画をまるで変へてしまったのではあるが、読み直してみて、破り捨てる程の気もしない。勿論たいしたものでは決してない。

先達うちから久敬にたのまれて居たので、昨日薄肉の浮彫でイブセンの肖像を作^{〔ママ〕}って置いたのを、今日は奮発して自分で石膏にとった。

.....

✓風まじりとどろき降りし夕立の霽^{しげ}れて夕を霧濃み流る

十六日

小さな油絵一枚。石膏色づけ。

晩、築地に行く。ロボット。江波、原瀬に逢ふ。

十七日

午後、久顕さんと神田に出る。金のあるうちとばかり、カンバス、絵具、ペンチ、ヘラ等買って、すっからかんで帰って来る。風烈し。水彩一枚。

○ 短かい、たった二日の間

自分の机を飾った薔薇

うだるような酷暑

心のせわしなさを

弁解をする気がないにしたところで

(全く無責任なのだからな)

自分は一度だっつつくづくと

お前をふりむきはしなかった

だから自分はお前に対して

特別な感情を持ちよう筈がない

それなのに、それにしても今

枯れてゆくお前の異常な美しさ

だらしく心のまはりにだれさがって

皺よって、ちぢくれて、水気のなくなった花びら

開かうともしないで

沢気のない紫に重く首垂れた蕾

今お前の失った生气

燃えるようなくれなる

焰のように逆立って輝いた力

潤ひ、沢、香り

(お前を瓶に移す時に

自分はちらと打たれたのだが――)

お前の失ったそれらのかはりに

今、お前は何を得てかくも美しいのか

自分はお前の姿の中に

若くして死んでいった友を思ったのだ

否、彼の友の死も亦
自分に何のかかはりがあらうぞ
——亡びゆくものには異常な美しさがある！²⁷⁸⁾

〔×を附す〕

十八日

○春も漸く深い頃に

おばさんの所から兄が貰ってきた孔雀草
それでも庭の真中に五六本
これも兄の手で植ゑるだけは植ゑてやったが
何の手をかけるでもなし
只一度しょうべんをさへかけてはやらなんだが
親がなくても子は育つ
お日様はお恵み深うていらっしゃる
私の大嫌ひな蜘蛛のような雨までが
優しい慈しみの母の心で
時々見舞うては手しほにかけたお蔭でか
ひろ——と背丈ものびて
黄色い花が二つ三つ
咲いたと思ったのも此の間のこと
今がん——と照りつける日に
めっきり花数も殖え揃って
ちか——と目にいたいほどのその派手な黄色
私どもの小さな庭を飾る
たったそれだけの孔雀草
さてそれなのに水もやらず
痩せた花茎が夜風に倒れても
竹一本立てるでもないこの心は
太陽や雨を信ずるのではない
甘へるでもない只の無精根
枯れる時が来たらお枯れなさい
其の時にまた詩の一つも書いて上げたいと
待つて居ます（すまないような気もしてゐます）

〔×を附す〕

午後三時過ぎから、久顕さんと井ノ頭辺を散歩する。日暮まで。

- ✓杉木立映せるあたり水の面に水蓮の花をふとも見出でつ²⁷⁹⁾
✓清水なす清きがままにすかし見る水中に揺るる水蓮の花^{〔睡〕}
✓すかし見る水中にあはれ水蓮の小花かすかに揺りて止まなく²⁸⁰⁾
✓よく見れば数知れずあり此の池の水蓮の花あまりかそけき^{〔睡〕}
×
✓目を痛み得も仰ぎ見ず川添ひの此の道のただに入日に向へば
✓生ひしげる薄わけわけ川添ひの小道ひとすぢに入日に向へり
×
✓夕日かげうつろひかねて此の森に明かく懈けくしばしを照るも
×
✓杉木立茂くしあれば水ぐめるこの草々は、多く名を知らず
×
✓入日にすぐに映え生ふる赤松をおほけなく見たりまた訪ふべかり
×
✓ほのかにもありつるものか道のへにふと見出でぬる釣鐘草は
×
✓葦の間に身隠り居つつ水鳥の呼びかはすなり女男なるらし
×
✓うつそみのものとしもなき水鳥のひたに戯れ遊ぶさま見てあれば^ざ
×
✓水蓮の浮葉のひまに小魚はも見えみ見えずみ群れて走るも^{〔睡〕}
×
✓弟よこれはこれかの小魚らが口音なるや静かには聞かな

十九日

- ✓透垣のひまにはしなくも見出でしか大き青蛙おし黙し動かず
✓おかしくも太りしものか青蛙柿の夏葉におし黙し居り
✓おし黙し大き青蛙柿の葉にひたにつき居り雲深き朝け²⁷⁸⁾
-

✓活けしまま忘れしものを凋るれば何かさみしきこれやこのばら
✓忘るともなく忘れたるこのばらの枯れの姿のあやしうもせまるか

朝のうち、おっかぶさるように曇って居た空が、昼前から晴れるとひどく暑くなる。
終日ごろ／＼して居る外、全く何もしない。

二十日 sunday

朝早く、母は弟をつれて大阪に旅立ってしまった。兄は例のように昨日から帰らない。
で自分はつまり、留守番といふ役を着せられてしまった訳だ。なか／＼暑い。けれども、
気持よくはあっても、苦しいようなことはない。急に広くなったような座敷の真中に机
を出して、原稿用紙、辞書、論説、雑誌とやたらとちらかしては見たものの、さてま
まったことをする精根もないので、あっちをつつつき、こっちをつつつきしたばかり。

この松は、

過ぐる日、梅雨の晴間のよき夕を、大家の旦那が尻からげ、素足にりり、鋤もつ、
(掘) 掘る手鋤く手もあやしう、徒言を拍子におかしく、さすがに植ゑゆきし瘦せ松。
この日頃、くろがねの土も裂くらむ炎天に、枯れもせで、新芽ふきたりこの松、これ
はやせ松。

〔×を附す〕

二十一日

快晴、風烈し。兄は何処を宿り歩いて居るのか、ちっとも帰って来ないので、一步も
外へ出ることが出来ない。

○夏の夜をあれる――

緑の闇を吹く風だ
柱時計が一時をうつ時
乞食も王様も同じ天国に遊ぶ時
貧富を越えて若い人々が
それ／＼の恋人の腕に抱かれて安らかな時
ここにたった一人の馬鹿者が地獄に落ちた

誰も知らないから誰も憐れまない
それ故馬鹿が考へた
(俺はあんまり他人のいいようにと願ったのだ
それと云ふのが誰もかれもが
俺に情なくみじめな顔をして見せたからだ
何といふ耻知らずだ
恋人?——こいつがすばらしいお天気者だ
ひどくしつこいくせに、風向で忽ちべろり赤い舌だ
友達?——これは結句いい慰みかもしれない
づにのって深入りさへしなければな、
家庭と社会はお払ひもの
人生!——こいつがちと手ごわいて——
だがこの地獄は何て暑いのだらう
其の上 底の知れない寒さが がたへと
俺の身内をゆすぶってかけまはるのだ
よし、俺は明日は何でも一つ
すばらしい正しい鏡を買ってやらう
俺は毎日そいつに向って
他人のようにこの俺を見てやるのだ
全く俺は長いこと自分のことときたら
これんばかりも考へてやらなかった
すまない話した
今夜一晩位
俺はこの地獄の隅っこで
目をぱっちりあいて起きてたってかまはない
見て居ろよ、明日だぞ、明日っからだ
罰当りめ!)
恐ろしい晩だ
夏の夜を、緑の闇を荒れまはる……
恐ろしい悪党だ
^{さか}賢し^さらな思想の渦だ——

[×を附す]

夜中十二時過ぎて、兄が保ちゃんをつれて帰って来る。兄が寝てしまってから、保ち

ゃんと三時になるまで話して居た。

二十二日

二十三日

午前中、中井さんがやって来る。兄を引っぱり出して出て行った。午後三沢が来る。四時半頃、保ちゃんに留守番をたのんで、三沢と一緒に家を出、大久保で別れて、自分は目黒の遠山さんの処へ行く。遠山さんで晩飯を御馳走になって、十時になって遠山さんと二人で小城さんへ行く。宿る。

二十四日

朝のうちに家に帰って来る。晩方家をあけて散歩して帰ったら、原瀬が宮田をつれて来て居た。

二十五日

今日といふ今日こそは、暑かった。空は終日曇って水蒸気が多く、少しの風もない。
夕方になって、驟が^{〔雨脱カ〕}やって来て涼しくはなったが、雨は沢山も降らないで止んだ。

✓かなぶんの片翅ちぎりでちぎりで捨つ——飛ばず這ひ居り片翅のかなぶん

✓宵に片翅ちぎりで捨てしかなぶんの今朝けもの隅に二つ蹲り居り

✓夜べ一夜あかし欲り飛びしかなぶんか襖のへりを懈げに攀ずる

二十六日

今日も亦、風が少しもない。蒸々として、終日日も照らない。夕方、遠く雷がなってパラ―と雨が降ったが、直ぐ止んでしまつて暑い。保ちゃんは昨日夕方帰つたし、兄も昨日から帰らないので、今日はまた独り居て静かである。

✓独り居のつれづれなれば夏の夜を火に集ふ虫をとりては殺す

✓火に集ふ虫をとりては殺すなり独り居る身のあやしくるほし

✓かなぶんの翅音高しゆくりなく独り寝る蚊帳を広くし思ふ

二十七日 sunday

今日も独かと思つて生々して覚めたのに、朝から讓二叔父様が英昌をつれて来られる。兄の帰るのを待つて居られたが、遂に帰らないので、午後四時半になって帰ってゆかれ

た。で昼間中、また――何にもしない。

○夏の夜があんまり静かで

ほそへごと虫が鳴いたりすると
おゝ、まだ七月も終わらないのに
私は何処かに秋を思っている
その秋は冬に続く秋であり
その冬は
おゝ、寒くて、退屈で、貧乏くさくて、永い……
はかない夏だ
まことに夏を楽しめる間は
ほんの短かいひと時だ
夏の夜があんまり静かで
一律な蟲の声などしみへ聞いてみると
(おゝ、私はまだ恋をしらない！)
恋をしたこともないのに
恋を楽しんだこともないのに
私はもう恋が逃げて了ったようにふと思ふ
もっと悪い時には斯んな風だ
――もう恋は遠^{ママ}永に滅びたのだ
決して再びかへることはない……

そんな時、つまびきの三味線か何かで
私はふと自分にかへるのだが
あゝ、私はとしをとったのではないかと思ふ
しんみりした悲しみが諦めに続く
私は台所にいて
一合ばかりのお酒を爛して
さて、たったひとりで机に向って
昆布巻かなにかをつまみながら
好きな猪口でちびへやるのだが――

私はとしをとったのかしらん
はかない恋とお酒とを

そっと天秤にかけたりして居る……

〔×を附す〕

二十八日

今日こそ独りだった。朝から晩まで独りだった。それで、何か出来たのか？ うん、確かに落着いてみたよ。本の五六十頁か百頁位、それは読んださ。だが全く、独りで居て、三度の飯を三度食ふといふことはどえらいことだな。尤も此の一週間、一度もお米を焚いたことはなかったがな。それでも、三度の飯を一度だってぬいたことはないのだからな。それどころではない。間食まで、きちんへと食ふのだからな。全く若しかしたら、俺は立派に愚痴を云ふ権利があると思ふんだ。出入商人の用ききをことはるだけさへ一骨だのに、月末に近いので、勘定書までもって来ては、にやへ笑ってゐやがるのだからな。それも金があればいいさ。まあいい。明日は石膏屋が来てくれますように。

二十九日

昼過ぎに、母と弟が帰って来る。夕食後、弟と中野の停車場向ふの方を散歩。

三十日

「悪しみの種」(一九二四.三.一四.)、「底知れぬ復讐」(一九二四.三.二三.)「幸なことに」(一九二三.五.三〇.) 三篇、日本詩人に投稿。

朝のうちに石膏屋が来てくれた。

三十一日

一昨日、夜散歩した時に、二つの小さな雑誌を買って来た。両方とも赤と黒とのなまへしい装幀の薄っぺらな雑誌だ。「文芸戦線」と「無産詩人」である。で今日それらを読んだ。退屈に堪えて。全く自分は鈍感であるかも知れない。失礼かも知れないが、退屈だった。先づ少しばかり言ふならば、「文芸戦線」。第一に文芸戦ならば、今少し文芸戦らしくやってほしい。斯んな風に泣言をきかされたり、駄々をこねられると、同情が愛想をつかしてしまふ。何と云っても、センチメンタルな分子を多分に含んで居るとしか思へない。尤も中西伊之助君自身「君らの耳にはその労働者の叫びがモップのように聴へるだらう！ヒステリック、センチメンタル、ニヒリスチック——あらゆる「理智的」「合理的」「實際的」を尊ぶ君等はさうした言葉を投げつけて、彼等労働者を非難するだらう」といふ。さう云はれるそばから、やっぱりセンチメンタルだといふ気がする。又言ふ。〔この虐げられた労働者の感情を労働者以外にたれが感ずることが出来よう?!〕

私は中西君といふ人がどんな人だか全く知らないが、若しも中西君が労働者ならば、何をこのんで文芸戦になど、のめへ―と出しゃばるのか。そんなひまになぜ実行を企てないのか。中西君が若しも労働者でないならば、君も亦かかる暴言を吐く前に、先づ一人の労働者を救ふ為^{〔欄外に記す〕}に労働者となる「方がいようだ」べきではないか。だがこれは余儀である。私が問題にしたいのは、文芸だ。私一個の楽天的宿命観は斯く教へる。「よきものは、何時か認められて永遠に生き、悪しきものは、必ず忘ぶる時が来る」。何うかよきものを生んでほしい。私はことわって置くが、私自身は絶対的な無産階級に目下属して居る。尤も、目下私は有閑者であることも事実である。も一つことわって置くことがある。私は理智的を尊ばない。私は幸にして、気まぐれで、自由だから。私は合理的がまた嫌いだ。それは退屈だから。もっと積極的に云へば、変化を好むから。私は實際的を蔑むものの一人だ。若しも中西君が云ふように、「實際」が、しかく世間的のものであるならば。私はより個的なものをのみ實際と観じて居る。そこで世間的な実際には、私はもうとつくに愛想をつかして居る。例へば夫婦が三人の子供を育てるならば、實際的ユートピアは到底、永遠に出現することがないと信ずるから。こんな根本的なものを無視して、制度、規矩、組織の改革を云々したところで、到底一時的な変質調和^{〔ママ〕}しか求むることは出来ない。

何故こんなことを云ふか。私は社会運動、殊に中の運動の為の運動に興味を持たないからだ。文芸界は全く皆が皆で登りつめて出色がないので、退屈になって来て居る。新らしいものが出ていい時だ。決して私は作者の階級題材の出所に文句は言はない。只々いいものを望んで居る。如何に生活意識に醒めたのだと云はれても、佐野君の「脱営兵とその妻」や田美野君の「貧乏神と葉葉服の青年」では、私には肯けない。宣伝文ならば又何を以てこんなまどろこしいことをするのか。全くの余裕から生れた余技である。八月号には、批評やら感想やら宣伝やら、何ともつかない断片やらばかりだから、何とも云へない。九月号は同人諸君の創作号とするさうだから、大いに期待して居る。

その他少しばかり気のついたこと。

階級といふものに対しては、私は特殊な考へをもつて居る。ブルジョア、ブルジョアと大した敵でもあるように云ふ。人類全体を基準とするならば、ブルジョアなるものは、如何に貧弱な一小部分であるか、こんなものを私は相手にしない。

私は不正を好まないように、亦女々しい泣言と虚元氣とを嫌ふ。尚云ふならば、ダイヤモンドを見て羨み妬む心は、許された時にはそのままその虚榮を受入れる賤しい心である。

さて、新聞記者的な眼をねむれ。一人の変態愛国者が自殺したからとて、それが何だ。あまり小さな事件に一々驚いたり、いかぶったりしないがいい。若しもそんな記事が人々を驚かせることを恐れるならば、そんな事件を大げさに云々して、更にも人々を迷はすかはりに、全くそんなことにかかづらふ馬鹿らしさを、人々に教へる方が遙かに効

果がある。

更に前田河広一郎氏の「文字で描いた漫画」は、富豪を知らず、文学者を知らず、科学者を知らず、政治を知らず、警察を知らず、プロレタリアを知らざる私にとってすら、実に面白いものである。といふ意は、しかくそれらが遊戯である。前田河氏があれだけの観察をなすのに、如何なる眼鏡をどのように使用したかが知り度い。卑屈も、独断も、^(狭)偏狭も、傲慢も、ここまで来ると、無邪気に似た滑稽味をおぼえさせる。

作品に就て。この作品は階級意識に覚めた新しい見解を持ち、社会的真実性を豊富に盛ってあることが、この作品を二重に価値づけて居る。これは、真に望ましい。だが気をつけなければならない。此の場合、逆は決して成立たない。文芸は、宣伝的でありうる。文芸は、革命的、煽動的でありうる。けれども、宣伝なる故に、煽動的なる故に、文芸では決してあり得ない。

あまりのべったらに書き続けたので、もう「無産詩人」に就いては、あまり書く気がしない。只、無産詩人諸君が、運動の為の運動に墮せず、案外確かな足どりを以て進んで居ることを喜ぶ。大将株らしい伊福部君の主張も、誠に穏当であり明確でもある。唯(一般民衆、無産階級の生活意識)は、私には少なからず概念的な気がするけれども。只ここに発表された詩からは、全く別種なものをしか受けとり得なかったことを告白しなければならない。私一個の撰択を問はれるならば、私は伊福部君の「父への手紙」「若葉」と壺井君の「薄暗い部屋にて」をとる。その次に、小笠原君の「百姓の宗教」と富田君の「都会の狼」をとる。それから、同人諸君の日本詩集(一九二四)批判を興味深く読んだことを附け加へる。雑記で広重君が、よい詩の価値を一枚のシャツに限定して居るあたりに、同人諸君の愛すべき気意がうかがはれ、率直な諸君の面目躍如たるものがある。

八月

一日

今朝になって、急に思ひ立って、晚七時五十分の汽車で鎌倉に来る。梅子叔母様と十二時過ぎまで話して居る。風は涼しいし夜は静かだが、名物の蚊を何うすることも出来ない。今も蚊帖^[ママ]の外にぶんーうなっている。

×

✓みるまに家々細りあかし乏し汽車いま東京を去らんとすなり
✓窓ゆ風^ほ頬にや、烈し夏の真夜闇をわが汽車はただに走れり

二日

✓この庭のただ中にして雀らが土を浴び居るも真^ま日^びい照るものを

×

✓夏梅の枝をしなへ揺り雀らがーとき遊び居しが風も吹かぬかも

午後浜に出てみる。例年ほどに華やかでないまでも、随分に人が出盛って居る。夜は叔母様達と皆で秋庭サンの処へ行く。

三日 sunday

✓梅の木のこかげに親子雀二羽 口あき羽根たれてしばしなにもせず

夕食後、湯地を訪ねる。

四日

雨が止んだり降ったりして、終日蒸々していけない。たまさかの雨であって見ても、ほんの始めの少しばかりしか有難味はない。

✓くろがねの土も裂けしを此の雨に 命生き得たり草も^あ吾もかも

×

✓ぬれへにぬれし竹垣黄金なすさみしうあかきつゐの入日に

×

✓あかねなす桜夏芽にほのかにも夕日したりけり雨は去りがてに

×

✓縁の^は端によせし障子の懈けけく黄色く照りて日のとくもうする

×

✓ぬれぬれてこの花草はさゆるぎもせず宵にもしるし雨は止まなくに

✓ほのぼのとあかし映せるにはたづみに雨の降る見ゆ音しせなくに

五日

埃が立たないでいいが、^[ママ]蒸々しる。夕食後、東京に帰って来る。

六日

朝、うつらへして居る時から雨が降って居ることを知って居たが、起きてみるとどえらい降りだ。そして終日降ったり止んだりした。降って居る間も、空の何処かにきつと澄みきった美しい青空があった。日が照って居ても、一方の空は真暗だった。永く永く降らなかった雨も、二日続くとどんなに退屈で蔭気なことか。

夕方から築地小劇場にゆく。天鵝絨の薔薇²⁸²⁾、死せる生²⁸³⁾、新夫婦²⁸⁴⁾だ。自分の頭

に暫らく全く詩がないように、感覚的にも自分は痺れて了って居る。でこれらの三つの芝居にも、決してあくびをしなかったまでも、また感激らしいものも持たなかった。けれどもそれだけに、演出に対しては可成り冷たい目をむけることも出来たのかも知れない。舞台がばらへになった。これは、二度目の演出の最終日であり、俳優が楽になって来て、だれて来たのも一因と見ることが出来よう。尤もあまり楽になったようにも思はれなかったけれども。この暑さでもあり、俳優には同情せられるとしても、これでは観客としては不愉快だ。それから、観衆の連日少ないのがその原因の一部をでもなしたならば、自分は俳優をもっとこっぴどく罰したい。最後に、全く俳優達の力が足りないのではないか？ 何故ならば、汐見洋、東屋三郎、友田恭介と頭株の処、三人までも休演して居るからだ。若しもこれがこの致命的の原因であるならば、自分は今更ながら芸の力に驚くものである。

中で自分が一番気になって居た「死せる生」が、演出としては殆ど立派と云へる程に演ぜられた。あの難解な対話が当然自分達に持って来さうな退屈を、一貫したムードといふようなものが、被ひかぶせてしまっている。これについては、自分は六月の三十日の所に一寸書いて置いたが、恐らくは、これが完全に演出されたとしても、自分達は此の種のもののみでは決して満足しないだらう。小山内薫氏が「天鵝絨の薔薇」の解説の中に云ってて居る。^{〔ママ〕}（「趣向」が芸術の大道でないことは分って居る。併しどんな芸術でも「趣向」を無視することが出来ないことも分って居る。） 処でこの「死せる生」は、全く「趣向」を無視しないまでも、確かに軽視して居る！

今日は、らくだったので、手をうって帰る。

七日

先達から、今度九日から始められるアルト・ハイデルベルヒ²⁸⁵⁾に、学生になって歌ふようにたのまれて居たので、歌も覚えて居るし、午後築地に出かれる。^{〔ママ〕}つかまる。二幕目の稽古をやったが、実に暑い。これで明日から冬服でやらなければならないかと思ふと、たまらない。

八日

今日は総稽古なので、十二時には築地に行って居た。丁度、自分の出る二幕目を一番先にしたので、夕方には帰ることが出来た。

〔欄外に記す〕
〔(白日自疑)〕

○そりや、すばらしい眺めだ

私は見た

数知れぬ白い屋根に屋根が続いて
波うって
遥かに霞む大都会を切って立つ大障壁
藍青の孤空に――
(真夏の南日が
濃い影を強く小さくくぎって
白緒の乾土に刻みつける)
私は見た
大空に、西の果に煌く異形
めくるめく積乱雲
その白いもくもくの上に
同じように白い巨大な羊が居る
更に高い所を仰ぎ
また眼下の大都会を見下して居る
それは暗示ではない
それは意味ではない
それは解釈を要しない
それはそのまゝ、高い喜びなのだ
否、あと一歩だ
あと一歩で
私は彼処に結ばれ
彼方に届くことが出来るのだ……
だが何といふいまましいことだ
私の心を見てくれ
私の目が天に昇る時
(あゝ、さいはひなき耳よ)
私の耳は地の底の哄笑を聞いたのだ
「用心しろよ
お前の目はあまりに大きなものを見て居る」
何事だ！
影だといふのか
それが幻だとしても
^{えさ}餌だ、毘だともいふのか
さかしらな耳よ
卑劣な、禍ひの耳よ

聾であれ、腐れ
とりとめのない悪魔の悪戯だ
(けれども、あゝ耳よ
若しもお前が正しいなら)
一瞬時の後にかの巨大なる羊は
私の前に
とろけて、綿となって流れて
あゝ、灰色の
何でもない
何でもない醜いものになって了った
(世の中にはまどはしい
似たような影がある！)
私は今迄に
幾度喜んだことか
希望におののいたことか
而もそれらが
何んな風に私の手の中に
影となって消えていったか
一片の空な煙となって――
(悪魔は外に居るのか
それとも悪魔は内に育ってゆくのかな)
外に向っては
私は挑むことが出来る
立衝くことが出来る
滅ぼすことが、勝つことが出来る
内なるものに対しては
私は忘れることが出来る
自ら欺くことを知って居る
けれども
あゝ、若しも両方だったなら
私は何うすることが出来るのだ
何によって知ることが出来るのだ
何によって見分けることが出来るのだ
何もない
それとも

ここには望むべき何ものもないのか
或は望む故に陥るのか
望みとはしかく不遜なものか
(あゝ、若しも両方であったなら!——)

[×を附す]

九日

✓ 檜葉垣の檜葉の夏芽のはつはつに朝日さし照りて暫しをうつらず
✓ むら檜葉の夏芽はつはつ朝日には光りてそよぐも秋をし近み²⁸⁶⁾

初日があくので、四時に築地に行く。四、五の二幕だけ見る。

十日

夕方築地へ行く。^[ママ]築木で何年ぶりかで石渡六三郎に逢った。

○あゝ、私は自らの異常なる享楽主義に驚く

夏、酷熱

その蠱惑は誰でもが知って居る

白日に漂ふ霧のような黄塵

じり―と肌に纏うて流れない汗

倦怠、疲労、情気

それらが渾然と一つになって

苦々しい嘔吐となる

だがそこには何といふ蠱惑があるのだ

高熱の病苦

筋骨の痛ましい解体

異常な肉患に導かれて

囁語の天に遊ぶ蠱惑である

さて私は悪魔めくものを愛する

疑忌と不信と

憎悪と侮蔑と

堪えられない羞耻とを愛する

血と傷と
痛苦と悪寒と
更に友情と血族愛——何といふ汚らはしき、醜さだ
私はそれをも愛する
それは梟と墓と
蝙蝠と蛇との
異形であり、奇怪である
あゝ、けれども其処には何といふ魅力があるのだ
それはいかめしい道学からはなれた
あまりに甘い人間味である
かくて私は
疑忌と不信との中に、自卑と高慢との中に
輝かしい光と希望とを見
憎悪と侮蔑と、更に堪えられない羞耻に
自らのいとしさを知り
血と傷と、痛苦と悪寒とを通して
幻想めく悩みと悦びとの交響を思ひ
更に友情と血族愛——何といふ汚らはしき、醜さだ
私はそこにこそ因縁の至上恩を觀ずる
あゝ、伝統の転覆
感情の更衣
私はこの神聖なる殉情の道心に
最上の感謝と祝福とを惜むまい——
あゝ、それにしても自らの異常なる享樂主義よ

〔×を附す〕

十一日

毎晩遅くなるので困る。一時過ぎ、二時過ぎるのも普通のようになってしまうて居る。其上、夜は寝苦しい。床に就いて一時間も、其上もまじへて居て、寝つかない。で今日は二幕目が終ると直ぐに帰って来る。それでも十一時前になってしまう。今日は石膏屋に行つて、先達のトルソーをとつて来る。帰りに江波を尋ねて、江波の処に置いて来る。

○八月も半ばの午さがり

まともな日ががん／＼と照りつけてはゐるけれども
空気は乾いてきた
空が遠く澄んできた
風が細かくなってゆく
栗の葉に光る日が白く鋭い
ちら／＼とさゆらぐ樹蔭が
藍色に冷やかな感触を思はせる
あゝ、向ふの物乾竿^(干)にはためく白
はた／＼とはためく白光を
つく／＼と悲しくも眺めて居る
あゝ、この異常な明るさ
きらばう光
蟬の声までが秋らしくさびてゆくのを
私にはどうすることも出来ない
ぼんやり手をこまねいて居る私の
硝子のような瞳に
節穴のような耳に
ただ／＼「事実」がぶつかっては撥返へる
あゝ、全く無表情な事実が――

〔×を附す〕

十二日

- 私は黒い涙を知って居る
私が嘗て彼女の火のような愛と
火のような憎しみとにおさらばを告げた時
(あゝ、二人はどんなに愛し合ったか
また二人はどんなに憎み合ったか
だが二人の愛が深く優しく溶けてゆく時
更に二人の憎しみが烈しく強く燃えさかるのを
私達二人に何うすることが出来たらう)
たった一滴の熱い涙が
私の拘攣った頬を伝って流れた
其の時から
私は黒い涙の魅惑を決して忘れない
烈しい嘔吐の後に感ずる

さびしい心の安けさに似る
不思議なその誇心を私は決して忘れない

〔×を附す〕

劇場で原瀬にあって、宮田、小松と銀座に出たりしたので、又々家に帰ったのは一時だった。

風がなく、苦しいように暑い。

十三日

✓真日てるこの街は死にたりたうかへでの並木二筋に埃をあびたり

十四日

十五日

終日曇って風が吹いて、一重物には寒いような日だ。築地に今日は色々な人が来て居た。

原瀬が来て居た。内藤氏が尋ねて来た。原瀬に^{〔紹介〕}照会される。内藤氏は、今度自分のマスクを銅にして貰ふようにたのんでもらった人。小林さん姉弟、道又氏、富田氏が来て居た。それから、野中花子さんが来て居た。大人びて、立派なお嬢さんになって。

十六日

十七日 sunday

二三日、多く曇って涼し過ぎる。相変らずよく眠らない為か、何をするのも億劫でいけない。築地に変った人が尋ねて来る。O氏だ。三年ぶり位ひで逢ったのだらう。

十八日

とう／＼雨がやって来る。終日降ったり止んだりして蒸暑い。築地もやうやく[・]ラク[・]になって、幾らか落着いたような気もするが、まだ／＼色んなことが残って居るような気がする。これといって考へて居るものもないのではあるけれども。

十九日

朝から石膏屋に行つて、十ポンドの石膏をもってくる。十ポンドといふ目方はひどく重いものだ。相変らず雨が降ったり止んだりして居るし、足駄をはいて傘を持って居る上に、道が悪いのだからたまらない。

江波の処へ行つて昼食を食つて、夕方まで遊んで居た。家に帰りつく時分には、訳もなく悲しく憤ほろしく、苛々してくる。

二十日

馬鹿なんだ、どいつもこいつも。自然だって、季節や天候だって、あんなにも馬鹿ぢやない。それでなければ、俺の不幸を何う説明すればいいんだ。

俺が正直なのか。フー、笑はしやがる。俺が正直だと云ふのか。フン、も一度云って見ろ。これをしも馬鹿だといふのなら、俺は馬鹿の馬鹿の大馬鹿なのだ。フン、世間には、いやどこにもここにも利巧な奴が多過ぎやがる。全くだ。だがまあいいさ。きつい不幸といふ奴は、大概三日も立つと、うまい具合に爆発するのよ。で俺の小さくなって居た馬鹿も、丁度四日目の今日でおさらばだ。嘘だとでも思ふなら、そら——ぶつかって見、触って見、馬鹿！

恐ろしくはないか、朝の予感はずべて見事に彼奴のプログラムを果たした。石膏は、型がこびりついてとれない。午後に何日目かで兄が帰って来て、気楽に一週間の留守を宣して出て行く。自分は夕食を取らないで、築地に出かける。約束の二時間前に、六時には築地に行ったのである。そして、八時過ぎて自分は次の報告を取ったのである。内藤氏は、昨日来た。そして、次に二十三日に来るだらうと。何の事か。自分は夢を強ひられて居たのか。時といふものは、そんなにも無意味なものなのか。そして、一人の時と労力とは！彼奴だ。確かに彼奴は居る！

二十一日

朝っぱらから、田端に内藤氏を訪ねる。けれども内藤氏は、自分の彫刻を一昨日築地に置いて来て居り、昨夜も自分と入違ひに築地に行つて、原型まで届けてあったのである。(で自分は、間もなく内藤氏と別れて築地に行く)。其上ブロンズはなかへ立派である。それならば、罪は第三者にあることは確かである。

終日ひどい風が吹く。街は埃の中に、まるで黄色く霞んで居る。夜は高い空に降るような星がキラ／＼と光って、小さな薄白い雲がちぎれ／＼になって飛んで居る。

✓野分めく風の夜半なり虫の聲が風の間合にちぎれて聞こえ来²⁸⁷⁾

✓電燈の下にかなぶん^{もと}が集ひて動かず雨戸鳴り木呻く外の風知らに

✓電燈に近く青き蚊帖透きて見ゆるかなぶんが十あまり蹲る見ゆる

二十二日

とう／＼雨がやってくる。しみったれた秋風と一緒に。けれども、午後には何うにか雨だけは止んだが、体がだるい。

午食後、江波を尋ね、江波と一緒に二科会に、彫刻二点、ブロンズの顔と石膏のトル

ソーを搬入。

江波と別れて、夕刻小石川へ行く。晩の御飯を頂いて、十時に家に帰る。

あゝ眠れない。もう二時を過ぎるだらう。体中がむくんで力なく、底痛みがする。体中がうだるようにほてってだるい。目の心が痛んで、勞れて勞れきって居るのに眠れない。決して眠れない。右の鼻から塩っぱい洩汁がだらしなく流れ出る。耳が遠くなって、咽がからへと痛い。自分は眠らない。

昨夜も眠らない。一昨夜も眠らない。而して、明方になってうとへすると思ふと、八時半までも眠てしまふのだ。

昼間は街を歩いて居ても、はっきりと自分を意識することがない。つけっぱなしの電燈から、むうへと暑さが流れてゐる。明るく透いて居る蚊帖に、小さなかなぶんが十程もこびりついて動かない。時たまに、蚊がなく程に死んだような静けさがとりまいて居る。空氣が動かない。台所にいって水を飲んでも、^{〔渴〕}喝きは止まらない。母と弟が正態もなく寝入って居る。腹這ひになって日本詩人を読むけれども、誰の詩も誰の詩も、唯同じ蒙^{〔蒙〕}ローとした虚空のような響きを残すばかりだ。煙草が吸ひたくて、煙草がまづい。夏風邪にやられたのだ。体温器の水銀が三十七度六分に上る。

二十三日

心弱きものよ

お前は疑ふ喜び

断ずる誇りを知らないのか

お前は八月がまだ半ばならば

(あの空を見る)

あんなに空が深くなっても

白い雲が鋭くなっても

更に風がこまやかになってきても

お前はまだへ夏を信ずるのか

そしては九月になってから

「事実」の前に跪いて訴へたり憐みを乞うたりして居る

最も親しいものらがお前に対して

お前の全信を集めてゐるものらが

何んなことをしたか

何んなことをするか

お前はよく知って居る

それだのにお前は彼等を信じ
彼等を信ずる為に
お前自身の臍甲斐なさを
「間違い」の中に平気で叩き込んで
悪いものと同じように正しいものをも避け
不思議な諦めの中にふるえながら
間違いだらけな事実を認めたりする――

えゝえゝ、私はその過信を耻ぢようとは思ひません
いえ、私はその過信を立派に耻ぢて居ます

〔×を附す〕

二時四十五分の汽車で、鎌倉にやって来る。気分は益々よくない。頭がびん――する。

二十四日

子供達と一緒に海に行く。海で伊藤^{〔千田是也〕}園夫、八代、小松の弟に逢ひ、子供達と別れて、皆と長谷の町へ出て昼食をすませて、再び浜に出たが、自分はいかにも勞れて居るので、皆に夕方自分の処を訪ねるように約して帰って来る。と一寢入して風呂を浴びる。大分遅くなって、三人がやって来た。風呂を浴びて夕食をとると、三人ともひどく勞れてしまつて、椅子によつて居睡りなどして居たが、十時十三分の汽車で東京に帰って行つた。後暫らく、梅子叔母様と話して居たが、ひどく悪寒がして来たので、床につくと直ぐに寝てしまった。

二十五日

終日雨が降ったり止んだり、薄い日がさしたりかげったりして居る。体は益々よくない。咽が痛い。頭が重い。それは神経痛の病状だ。頭の右半がびく――と拘攣的に痛んで、たまらなく不愉快である。

○あゝ、求むる心の勇ましさは
何処にかくれたのか
魂はけれども求める
求め得られぬ故に更に真剣に
更に高きものに向つて燃えさかる

自然は魂の隠家でさへなくなった
平静と安定とは生ける者への最大の侮辱である
(ここに求むる心の勇ましさがあ)

本体は決して其自身に単存しない
それは無限数の一面にかくまはれたる
正しい必然なる、個々である
(ここに求むる心の勇ましさがあ)

さればあらゆる善と同じように
私はあらゆる悪をも知り尽さねばならない
美に対する醜をも、神と幽霊とをも
私は知り尽さねばならない
(ここに求むる心の勇ましさがあ)

決して求め得られぬ故に、私は
更に真剣な、より高きものに対する
止み難い願望に燃え苛まれる
あゝ、けれども欲望が益し、欲望が高まるのに……
何故か求むる心の勇ましさは
私からだん――遠いものになってゆく――

[×を附す]

夜に入って、遂に雨らしい雨が降って来る。夜がめいるような静けさを以て、病みついた心身を引つける。

雨の夜に聞く
華やかにも多彩な沈黙である
萌黄の掛布団を膝までかけて
心もち熱を持った身を横たへると
さゆらぎもせず
紫に、真直に、昇っては消える煙草の煙

眼鏡をはづした瞳に
明る過ぎる電燈の光を程よく弱めて
柔らかくひろがる白い蚊帖
静かに重い気流を感じる
少しばかりの暑さをじとこらへて居ると
眼を遮る赤、黄、緑……
あゝ、これはあまりにも寂しい華景だ
私は嘗て只一度
こんな美しい悩ましい景色を見たことがある
あゝ、仲よく遊んだあの娘との
思ひもかけなかった突然の別れ
あの何ともなかった別れをふと思ひあたる——

遅い夜に聞く
華やかにも多彩な沈黙である
こんな沈黙を通して
私は何ともなかった遠い別れの姿を
斯くも媚びやかに、斯くも悩ましく
この多彩な情景としてふと思ひあたる
雨のねにきく——

〔×を附す〕

二十六日

雨がひどい。風が嵐めいて荒れる。

寫村の元さんの一周忌なので、母が東京から出て来る。讓二叔父様が英昌をつれて来られる。

二十七日

風がはげしく、情なく薄い日が照ったが、雨は止みさうで止まない。終日子供達が家に居てさわがしい。頭は重い。気色は更にもよくない。其上晩には齒が痛んでやるせない。ヨヂムチンキを塗ったり、梅干をはったりしても、不愉快である。

新聞で二科の鑑査を見る。見事に二点とも落選。入選者は、浅野^{〔孟〕}猛府氏の唯一点だ。自分のものに就いては言はない。一会員が云ふ「若い人々が骨惜しみしていけない」と。自分に云はせれば、手におへない大きなものよりも、力のこもった小品の方が遙かに真実である。けれども、絶体的な因は、何と云っても会場の過小と比較的会員、会友の過

多にあるのであらうから、また止むを得ないかも知れない。さうすれば、前の言はこの
間に板^挟みとなって居、会員の弁解として至極当然なものだから。

二十八日

○八月も末になると

早く、桜葉の半ばは黄ばみ
百日紅の最後の花むらは色薄くまばらだ

二日の雨風の後

まだ空には重い雲が残って居るけれども
力ない西日が黄色い夕べを
蟬の音が慌しくあはれだ

まことに美しい

これは出来上った美しさだ
したたるような葉鶏頭
コスモスの森

ああ、だが

これはあぶなっかしい
華やかならば、賑はしければ
いよ——寂しい、あぶなっかしい美だ

〔×を附す〕

○嵐の後の

朝の日があまりに明るいので
それよりもたった一日で
めっきりと秋らしくなったのが——

海が青い

花草の枝葉の乱れかた
私も庭下駄をひっかけて下り立つと
おや、見てゐたのか
気もちよく日なたに埋まって

眠って居るとばかり思った婆犬
大きなあくび
犬らしい無作法も可愛く
のっぴりとそばへよって来て
一なめ二なめ、私の手をなめまはした上で
さて、摺り寄り摺り寄り
身を以て親しみを売ってくる……

蟬の声はするけれども
何処かに早く淋しさが来てゐるのだ
アンネや、お前のその人なつこい心が
私にはよくわかる――

〔×を附す〕

晴れた。讓二叔父様が、子供達をつれて江の島へ行かれたので、終日静かだ。けれども頭が痛い。歯が痛い。悲しい。

二十九日

午後六時一分の汽車で帰京。歯が痛いので、気分が少しもすぐれない。

三十日

朝八時に家を出る。駒沢に大内氏²⁸⁵⁾を尋ねたが留守だったので、原宿までひきかへして原瀬を尋ね、午後二時過ぎ、二人で銀座に出、歩きまはってライオンにおちつく。晩、原瀬と江波を尋ねたが留守。神田に出て買物などして、十時に家に帰る。

三十一日

ひどく暑い。朝から江波を尋ね、一緒に二科落選彫刻を受取りにいく。

九月

一日

朝、川路柳虹氏を尋ねる。「真昼の散策」(一九二四・七・六)「嵐の後の」(一九二四・八・二八)「事実」(一九二四・八・一一)の三篇、日本詩人へ投稿。

大震災から満一年、色々の事が色々に変りはしたけれども、どの一年だって特に思ひ起こせば、この位の变りは当たり前だらう。震災記念日と銘打って、方々で色々なことが企てられる。なか――馬鹿げたことまでが。晩に久顕サンと日本橋に出て見る。店々の半数は戸をメめて休んで居る。それなのに、出て居る程の人は何となくそは――して居る。だから、時たま開いてゐるカフェーあたりは、入かはり立かはりなか――賑はつてゐる。カワツとロシアに行つて、十二時頃に帰つて来る。

二日

終日家に居たものの、何にもしない。午後四時頃になって、梅子叔母様が昌道をつれて来られる。

三日

〔江波智彰〕

友秋様――

今日ひよっと思ひ立て、弟と二科会の展覧会を見に行つた。処で早速君に手紙を書くのは外でもない、是非君も亦一度、二科会をケンプツするようにお勧めしたいからだ。藤川勇造といふ人が、W 翁といふ彫刻を出品して居る。W 翁は丁度、鶏卵程の頭だけを出して、ゴワゴワの羽織、袴に埋まって、これもゴツツイ椅子に儼然と腰をかけて居るのだ。二科と云へば新らし屋が多く、また、実際新らしいので幅をきかして居るのだと思つて居たが、これはまだ明治も二十年代か、或は三十年代頃の遺物としか受取れない。W 翁、色艶も生々しい、はだかん坊の中に座って、内心少しは恐れをなして、おろ――と落着かないのではないかと思ふが、追がに昔の人は違い、色にも出さず、儼然とがんばつて居るところ、追にロダンのヂキ弟子だ。皮肉をぬきにして、全く許せない、とんでもないアナクロニズムだ。見て居たら、おかしさと腹立たしさを通り越して、悲しくなつて来た。

序だから氣のつくことをぼつぼつ書いて置く。第一室で、上島二郎氏の「金魚と花」は、山氣たっぷりながら、何から何まで自分で考へ出した処に価値がある。山氣も斯ういふ風に用ゐられると、氣持もいいし意義もある。それにひきかへて、海老原喜之助氏の「挨拶」及「街上」は、アンリ・ルソーをそのまま失敬したもので、感激の余りにしても、此処まで失敬するのはあまりひどい。会友、横井弘三氏の三点。不思議な筆と生な色と、蟲めがねとを以て、目を貫くような画がかかれてゐる。ここで一昨年〔欄外に記す〕の横井氏の絵が大変な評判だったことを思ひ出す。一昨年〔欄外に記す〕の日記に、私はそれに就いて次のように書いて居る。(次に、今度馬鹿に評判の高い横井弘三氏の「郊外のオモチャ屋」がある。何と現代的(?)な絵だらう。〔欄外に記す〕人間的に又視覚的に〕、すっかり子供になりきつた横井氏は、画家としてまで子供になつてしまったことを何う考へたものか! 子供にかへれとの意は、子供のように上手になれといふことである。子供のように下手になれと云ふ意味ではな

い。純情に殉ぜよといふのである。自己を偽って純情を真似よといふのではない。氏の大きな絵には、一面に頗る興味深い物等が、頗る興味深く並べられてゐる。ぶっくら棒な日廻草が、大きな頭をあっちこちにうなだれ、うすべりの上には町っ子の一群が思ひ思ひの形をして居り、店には赤いオモチャがぎっしり並び、立派な屋根の向ふには、店から飛び出したような飛行機が飛んで居る。そして、皮肉をぬきにして、氏の絵はあまりにオモチャ屋の感じになってしまったのである。肖像画に至っては、更に失敗して居ると云へるだらう。あの不思議なタッチと不思議なバックとは、御本尊の、より内的な何者かを暗示し補佐するものでなければ、たいした意義がなささうである。

処が今年の氏の絵は、めっきり気持がよくなって居る。街ったところが少しもなくなって居る。そんな意味で、「窓」よりも「春の海」「牧場」の方がいい。津田青楓氏のは、油絵もいいが日本画の方が更に面白い。誠に洒脱なところがある。

けれども私は、今度の氏の二点は、少々複雑な感じがするように思ふ。私は一昨年の、小さな「赤いばら」の方が好きだった。ザッキン氏の大きな木彫「母子」は、思はせぶりな金箔の色づけと共に、あのこけおどしをのぞいたならば、恐らくは一二の変態者を喜ばす位なものだらうと思はれる。^{〔欄外に記す〕}「一体斯うしたネグロ芸術的な稚拙をねらふならば、何処までも興味を中心にして、寧ろ奔放にやって行きたい。あまりに理智的な構想から、観者は必然的により理智的な見方なり、意味なりを要求せずには居られない。氏のこけおどしの裏には、異常な理智のひらめきがある。」浅野孟府氏の「顔」は、今度の彫刻部の全名誉を荷った唯一の入撰作としては、物足らないものがあるにしても、亦可憐なものを持って居る。

第二室。ザッキン氏の浮彫「女楽師」がある。これは全体のコムポジションにもいやみがなく、無理がなく、そして材料の色と感触とが手伝って、何かまとまった一つのを投げかける。

それから、横山潤之助氏の六点が氏の新面目を見せて居る。大まかな筆つきと断定的な、^{〔欄外に記す〕}「と云ふより奔放な」線とで（私は氏の色を全然好かなかったけれども）、覇気を見せて居た氏が、どっしりと落着いてしまつて居る。これは併し、近頃のピカソから来て居ることを全然否むことが出来ない。だから私は、このままの横山氏では承知出来ない。私は興味を以て、氏の次の製作に待つものである。

次に横井礼市氏が、これも新面目を見せて居る。私は横井氏のものは、あの大きな八角時計のような顔の子供が、真四角の蜜柑を握つて居た頃から興味を以て見て居たが、横井氏はその傾向をつき進めて、タッチは大きく強く、形は簡粗に簡粗に、色は平面的に生になつて行つて、一昨年には、其の極に達した。^{〔欄外に記す〕}「横井氏は白色を極めて強く使つたが、一昨年には、それが生々しい黄にまでなつたのである。」私は一昨年の印象を簡単に次のように記して居る。（横井氏の諸作は、どれも或る面白味を持って居るが、今迄の氏のものにあまり見ないナマな黄色が一つ二つ、ひどく目を妨げる。あの黄色は、

何かに変るべきではあるまいか?)。処で今度の氏のものには、錆びとか渋みとか云へるようなものがある。角がなくなって、太い輪郭がなくなって、おほらかに豊かな曲線をさへ見ることが出来る。「庭」もいいが、私は甲山如意輪観音を取る。

黒田重太郎氏の、ロート氏への弟子入りのような感じは不愉快である。第三室に入つて、石井柏亭氏のいつもながらのイージーゴーイングな多作には、全く不快になる。概念的な色とブリキ細工のような堅さと。

第五室。木下孝則氏の六点。日本では一寸画けない、美しいモデルによって描かれた美しい絵である。小林喜一郎氏、木下義謙氏のそれぞれの真面目さは気持がいい。

第六室。椎塚氏〔猪知雄〕のいつもながらの悪趣味に呆れる。

残念ながら、ビッシェール氏、ロート氏、アスラン氏の或物などが、第一線にあるといふ感じがする。

安井曾太郎氏の沢山のまるまっこい絵の中で、新緑を画いた二点の風景を気持よく見た。

四日

午後、小石川へ行く。日暮から雨が降り出したので宿る。

五日

雨の晴間を見て、午後家に帰る。日暮から雨が本降りになる。

✓独り居れば夜はかも秋はいみじかりただあるはわれとこほろぎの声と

六日

○夜べー夜降りついで雨が

止んだとはいふばかり

めざめては……

どんよりと重い秋の朝を

こほろぎがしみらな声を鳴きつづける

やせた小松の一葉一葉にとまった露

豌豆の花が白く濡れてゐる

私はいつまでも床をはなれる気がしないで

腹這ひになって考へる

——今日は一つ足袋を出して貰はう

そのまにもこほろぎは鳴き止まず

どんよりと重い秋の朝
止んでゐるとはいふばかり
今日も糠のような雨が
まだまだ止んだり降ったりすることだらう

〔×を附す〕

✓今日一日飲む茶も飲む茶も小便となりての後のまた膚寒き

終日、秋らしい小雨が降ったり止んだりして居る。午後久頭サンと神田に出、神田で久頭サンと別れて銀座に出、望紗瑠莊の仏展覧会を見る。なかへ面白いいものがぽつぽつある。出品目録によって、少しばかり書いて見るならば、巖谷小波氏出品の石地藏の首（震災後、浅草寺内に採集^{〔てカ〕}）。鶏卵二倍大の小さなものであるが、すなほなデリケートな愛すべき首である。同氏の銅誕生仏（古印度）も愛すべきもので、六寸程の立像。右手を頭の上のにせた変ったものである。大槻式雄氏出品のうち、二つのシャム仏——一つはアユチャ時代とされて居る——殊に一つの方の面頭のグロテスクネス、あぐらをかいて居る、腰から下の幼稚な不思議な表現、及び左手の手首の奇妙な折れ方など、面白いものがある。入江新八氏出品のうち、三尊の装飾八角台座にのった、一尺ばかりのシャム立像仏の木彫を面白く思った。殊に、面部、異常に幅広い眉から、そりをうちながら垂れ下った鼻の辺を。重松清行氏出品の懸仏（七射一面）もいいと思った。これは、径八寸程の漆染りの円板の中央に大きな梵字が入って、上部に二体、左右に一体づつ、下部に三体、形大揃の七つの鑄物の座仏がついて居るもので、一つ一つがやりっぱなしらしい面白い形を持って居る。それから、鈴木市之助氏出品のうち、二個の器物（七百年前ペルシャ祭器及び五百年前印度祭器）は、それぞれ平凡な形ではあるが、意匠、模様に珍らしいものがある。望紗瑠莊出品のうち、六朝金銅仏三点は、佐藤隆三氏出品の六朝時代の小さな金銅仏と、又同氏の鍍金揚柳観音（高サ四寸五分、六朝時代）と共に好きだった。そして最後に、同じ望紗瑠莊出品の天龍石窟仏尊（東峰第二窟脇侍像菩薩）は、追に優れたものである。眉と目と、そして口元の辺に幾辺柔らかなように思はれるが、天竜仏の特徴を認めることが出来る。

七日

晴々と霽れて秋気高し。朝、三沢がやって来る。三沢と学校に行つて見る。帝展製作に皆が汗みどろの出精振りを見て、三時に家に帰ると、一風呂あびて、母と邦楽座²⁸⁹⁾にゆく。吉右エ門²⁹⁰⁾大一座と銘して、福助^{〔中村〕}の飛込み。各等売切といふのを、三等切符

で四等の後の立見物。閑人われらが、よりもよって二日目の日曜日に出かけたことのもったいなさよ。

一番目が近江源氏先陣館。例のチョボにのって振りよろしき時代物。追にきりきりと引しめる所はあるが、ともすれば間延びがして退屈させられるのは、高見の見物。チョボが耳に遠いせいもあらうけれども。

中幕上が、坪内博士のお夏狂らん²⁹¹⁾。まことに美しい所作物だ。福助のおなつは、足腰の痛さを忘れさせる。台本もよく書かれて居るだらうけれども、福助は巧み以上に出て、濃厚な空気なり色彩なりを織出して居ると云へる。

母は、如何にも身が入っているが、あゝまでも里子等がお夏をいぢめるのは酷い、あんまりだと云ふ。私に云はせるならば、福助が全くのお夏になりきって、あゝまでも里子等にいぢめられて居るのである。即ち母は母なりに、おなつにすっかりとらへられて了ったのである。私は、所謂旧劇の中で、斯うした所作事だけには立派な独在性を認め、此種のもの^{〔自カ〕}の正しい発達が日本独持なものを世界的にまで主張することが出来るものであると思ひ、期するものだ。私は今日の福助のあはれにも濃艶な叙情詩を、又極めて魅惑に満ちた幾つかの表情とを忘れないだらう。此種のものでユーモラスなものでは、鈍太郎、芋ほり長者、二人袴、太刀盗人等を興味をもって見たが、斯ういふものをもっともっと見たくも思ひ、また少しでも本質的に、此の種の類型に就いてしらべても見度いと思つて居る。中幕の下は、三社祭で、時藏の善玉、三津五郎の悪玉で、踊って踊って踊りぬくけれども（私は菊五郎と三津五郎の同じものを見たことがあるが）、どうも一本調子で人を倦ませる。

式番目が八幡祭小望月の賑。三幕の黙阿弥物だが、一幕だけ見て、労れてはくるし、お夏狂らんで沢山ではあるし、いつもになってゆくものときめて、さっさと帰つて来て了ふ。

八日

晴天。早昼で久顕サンと、市川に青田サンをお訪ねする。晩まで居て、十時頃帰宅。

九日

○ ひたすらに願ふ心がある

ひたすらにあやぶむ心がある

よそ人をも懐かしむ心がある

ほのかな影に怯へる心がある

何故か。朝が美しければ、美しければ

恐ろしい夜を苛々と待ちきれない心がある

〔×を附す〕

○ピエローの笑顔は儚い――

アレキンの悲しみを思ふ人よ――

それから

何にも知らない横着者

殉情のコランピーヌ……

〔×を附す〕

久し振りで築地小劇場に出かける。カイザーの「瓦斯」第一部²⁹²⁾だ。自分も少しばかりどうかして居たかも知れないが、演出の方も何処かに漠然とした処があったようだ。頭ではよく解って居ることが、感情となってぴたりと感じて来ない。そのくせ個人個人にも、一つ一つのシーンにも、極めて強いものを感じるものがある。で、これはこれらの綜合に何等かの欠陥があるものと思はれる。第四幕の演説の場は、断章としてさへ極めて興味あり、また、演出としても、これだけでさへまとまった何者かを与へる程のものを持って居る。その筋の眼が光って、女達の演説が大部分削除されて居なかったならば、更に盛なものがあったらうと思はれる。

✓蚊帖に入りてうつゝし居れば時雨かも屋根に音して間もなくゆけり

十日

秋日私を終日家に居て――

夕方、小石川へお使物をもって行く。

泣き度い時には泣け

かまはずにかぶりをふって泣け

おらびたって泣け

私は泣いて居る人を見ると嬉しくなる

あゝ、あの人はまだ泣くことが出来る……

〔×を附す〕

十一日

○生垣の向ふの

菜園の向ふの

隣りと云へばお隣りの

お謡のお師匠様は

信心深うておいでなさる

あしたゆふべのお勤めには

(大きなお声はお手のもの)

やむごとない長いお経の三くだり半

御精心には朝早から

たっつけ袴で肥柄杓

ざんぎり頭のふりふりに

道に肥える秋茄子の色

電線を伝ひ伝ひ伸びは伸びたり

豌豆の蔓に

朝焼にあざやかな白い花々

これは沢山

今朝はまた

杉葉折り、枯葉掃かして

片隅に浄め焚かれるおんけはい

風もない濃青の空に

もくもくと昇って消える白煙

得心の、感心の、お師匠様の童顔と

閑かと云へば閑かながらに

秋がめっきり更けてゆきます

[×を附す]

父上の五年祭を家中でささやかに——午前中、青田サンが市川からわざへ出て来られ、午食後間もなく帰られる。夕方にはお玉様が来られる。

十二日

✓さんさんと秋の雨降る庭水に小泡流れ来^く流れては消ゆる

七月三十一日の処に、「文芸戦線」といふ小雑誌に就いて少しばかり感想を書いて置いた。処で、此の種の運動が兎角やかましい今日、もう少しその内容及び程度をも知って置いてもいいように思はれるので、五十銭奮発して、九月創作号を買って来た。だがつまりは、見事に裏切られたような気がする。小説五篇、戯曲四篇、どれもこれも題材が特種なので、兎も角も一寸目新しく思ひながら読んだ。頭が重い。一々の批判は止めにする。唯、題材が何であらうと、如何に特殊なものであらうと、単なる印象記は遂に印象記であり、××乃至はそれに類似したくない言葉（書く人は、さもきわどいことでもやって居るかの如く誇らしげではあるが）を用ゐることを以て小さな自己満足に浸り、いい気になって居るような処は、更に趣味がよくない。狩野氏の「太陽」の如きは、同人諸君が漫然たるロマンチズムとして退けてゐる処の「人類愛」と、同じ程度に漠然たるものではないかを疑はしめる。更に同氏の「太陽は光を失ふ」は、戯曲として全然無価値なものであるに於ては、誠に鼻もちがならない。武藤直治氏の戯曲「人間と猿」が、唯一篇出色である。

（欄外に記す）

【←小説の方では、伊藤永之介氏の「泥溝」がリズムカルな文体の中に、生々と特殊な空気をただよはせてゐる。】

も一つ諸君に注意するならば、諸君自身「特殊なる事実」に興味を奪はれてしまって、いつのまにか本質的な何者にも触れないで了つたような傾きがある。これでは、ブルジョア文学に対抗する意識は絶無であると云はれても仕方がない。例へばブルジョア作家が、上品に上品に奇を衒って行くとすれば、諸君はまた、下品に下品にと奇を衒って居るようなもので、どっちにした処で、一直線の上に居るようなものだ。現在日本を問はない。私は既成文学の中にも、もっと――本質的なものを握って居る人々があつたと思ふ。これだけは、極めて真面目でいふ。私は諸君の悪戦苦闘の意気に惚れる。向ふ半歳側を向いて居ますから、どうか勉強してすばらしい諸君の面目を見せて下さい。

十三日

朝から駒沢に大内青圃氏を訪ね、夕方帰って来る。晴れては居たが、風がなく、終日頭の重い日だ。

十四日 sunday

午後から築地の舞台稽古を見にゆく。十時半に帰って来ると、川村が来て居る。久頭サンと向ひ合ひで、もういい気持ちらしくなつて居る。永年の間、家賃一つ入れずお世話になつたお蔭で、千や二千の銭はいつでもどうにでもなる。一寸出るにも、二百や三百は持つようになったから、御恩がへしに心ばかり皆に御馳走をしたいといふので、日曜日をねらつて早くから来て居たのである。で自分が帰って来たのを喜んでくれて、やたらと酒をつがれる。むつつりと黙りこんだごま塩頭の巡査が、斯うしてわざ／＼訪ねて

来るのは、お世辞でもなければ、得意になって居るのでもない。全の「心」なのだ。有難い気がする。雨曇不定。

十五日

怪しい天気だったが、昼間中何うにかもって居る。田辺サンに寄って、江波の処を尋ね二人で上野に出、原瀬を尋ねて、四時頃に帰って来る。夜は築地に手伝ひにゆく。雨。

十六日

今日から、江波と原瀬の処でモデルを使ふようにしたので、朝から原瀬の処へ行く。雨は止まず、昼頃には益々ひどい。外にも出られない程なので、ぐず―して、四時頃までも原瀬の処に居た。帰って来た頃から、雨は益々はげしく、風さへ吹いて本物の嵐がやって来る。

十七日

暴風雨の中を原瀬の処へ出かけたが、モデルは来ない。江波も来ない。昼過ぎには止んだので、原瀬と神田に出て、築地にゆく²⁹³⁾。築地は丁度、前の会員券の最終日といふので、大変な賑ひ方。^{〔ママ〕}初まって以来の大入だったので、満員御札を掲げて大入袋を出すといふ騒ぎ。一寸張合ひがある。

十八日

昼前を原瀬の処で過し、夕方から築地へ出かける。

十九日

昨日と同じ。

二十日

われながら、数日来全く気力がない。夏が逝ってしまったからだ。否、もっと悪いことに、丁度夏が逝って了はうとして居るからだ。

朝は、原瀬の家で過し、築地には行かない。

私は床の上に寝そべって

読みさしの本を閉ちて

明日のことを考へる

明後日のことを考へる

一年の後二年の後のことを考へて居る

(そしてつまりは何にもわからなくなるまで)

隣室で母上がふむミシンの音がとだえると

あゝ、夜がひどく静かだ

私は耳をそばだてて遠い虫の音を聞き取らうとして居る

明るい電燈のもとに 秋の夜がシンと更けてゆく

兄は帰るまい

弟もまだ帰ってこない……

[×を附す]

二十一日 sunday

雨。朝から江波の処に出かける。原瀬もやって来る。午後三人で院展を見に行く。雨が降って会場が暗い上に、あまり親切にみななかったので、一々に就いてなど書くことも出来ない。いいと思ったものを、順序なく書きつらねて置く。小川芋銭氏の二点、川端龍子氏の「龍安泉石」、前田青邨氏の「彦火火出見尊」。序だから云ふが、同氏の「花壳」は「彦火火出見尊」の青邨^{〔備〕}氏の技倆を疑はしめるものだ。郷倉千鞠氏の「草辺蟹の図」及「童児水浴」も面白い。近藤浩一路氏の京洛十題の内の或る物、先づそんなものか。横山大観氏の「早春」、小川千甕氏の「晩帰」を加へておく。彫刻では、保田龍門氏の立てる女一点を挙げる。

二十二日

二十三日

四時頃に、梅子叔母様が出て来られる。

二十四日

原瀬の処で遅く昼食をすませ、梅子叔母様から頼まれて居たので、青山に廻って墓碑をしらべて、夕方築地に行く。

✓夜べ起き居て物書くとして書き果てず煙草とりしに鳴きし秋の蚊は

二十五日

二十六日

朝がひどく寒い。昼間はじり――と暑いけれども、空と云ひ樹々と云ひ、殊に空気はすっかり秋らしくなってしまった。

頭が重い。歯が痛い。而して、手はもう十日にもなるのに直らない。

二十七日

終日曇って暗くて寒い。原瀬の処も、今日で一先づ打切ることにする。頭が重い。

二十八日 sunday

(序に代ふる詞) (私は喋る)

済
□

沈黙は尊い

くだらないお喋りよりも遥に尊い

否、絶対に沈黙が必要な時がある

けれどもお喋りは又何と尊いか

なまじっかに喋る程よりは沈黙せよ

だが又なまじっかに喋る程よりは

喋って喋って、喋りぬくのだ

——しまった、まづいことを喋って了った

——あんなくだらないことを喋りやがる

だがべらべらと喋り続けてみろ

言葉は正直なものだ

つまりはお前に手近なものばかりを綴り出す

ほんとのことばかり喋れないように

嘘ばかりそんなに喋れるものではない

其の上悪いことでさへ隠しだてするよりは数等ましだ

更にかいかぶられることはたまらないことだ!

さて、人の喋るのを聞いてみろ

同じ言葉がどんなに人々によって違ったことを語るか

そんな饒舌の前に勞れきって道を失ふ前に

私達はそんな饒舌をむきになって聞きはしない

私達は程よくエッセンシャルなものを摘み取ることを知ってゐる

其の上善悪を越えて大事な事は

常に大きく或は強く語られる

私は喋る

こころ
その意は——

私はささやかな名誉と共に

あらゆる耻をも自ら受けたい

私は沈黙を通して

底しれず莊嚴なる自己の影絵を見せる程よりは

私は喋る

喋って、喋って――

それは全我を、私といふ全善惡を

私は全彫^{まるぼり}の私をここに刻んで見て貰ひ度い！

朝がひどく寒い。縁先に情けないような秋日がのぞくと、私は待つて居たような気持で縁先に出て背中に日をうけ、新聞を読みはじめた。日が段々に強くなり、縁側に深く入りこむ頃には、私もだら／＼ととろけて来て、遂に長々と寝そべって了った頃から、今度は段々暑くなって来た。百舌鳥が盛に鳴いては飛びまはって居る。白い雲の間に蒼空がまぶしく輝く。足の脹脛がじり／＼と焦げるように思つてのそ／＼に日蔭に、畳の上に逃げてほんやりして居ると、秋の蠅がそこらを音もなく飛んで居る。外はいいだらうと思ふ。多摩川べり、吉祥寺、田舎道、原っぱと考へてみる。「金なくて何の要ある秋景色」。斯うおっこちてみて、さて、誘ふ程の友も持たないことを思つてみる。だがかうやってだらけた気持もまんざらではない。そんなことを漫然と考へて居ると、昼近く志願兵伍長の服を着て、中井さんが来た。昼食を共にして、今度は二人になったので、たわいないなりに話しがはずむ。お土産の葡萄の色もいい。味もいい。さて、伍長の夢もなか／＼大きい。面白い。夕飯も共にして、中井さんを送つて外へ出ると、暮れゆく秋の外景も身にこたへる。霧がかかつて霞んだながめが、茄子畑が、銀杏の若樹が、いつも安っぽく見る普請場も悪くない。僅か十五分か二十分、駅から帰る頃はとつぷり暮れて、駅前^の明るい店並の人出。裏通りのひっそりと静まつて、犬も吠へない。

二十九日

十一月のように寒い。朝から雨が降り出したが、昼には風さへはげしく、終日家の中にとじこもつて、ごろ／＼したり、お茶を飲んだり、冗言を話す人もないから、本など読んで見ても続かず、日暮前には退屈寝に寝入ってしまったたり、夕食もすんで、あまりに静かな頃を、何を思ひ出てか、母が三絃をとつて古めかしいものを奏で出る。

三十日

終日曇つて、じめ／＼してゐる。午後から江波を尋ねて、一緒に三時頃、原瀬の処に出かけたが、留守なので蓄音器を聞いたりして、四時半頃に帰つて来る。お茶の水で江

波と別れて、自分は報知講堂にモジュヒン氏の告別独唱会を聞きにゆく。久々にいい音楽会を聞いて、気持ちがいい。兎も角も、バスのいいのを聞いたことがないので、すばらしい気がした。自分がはじめてバスのいいのを聞いたのは、三四年も前、やはり露人の確かセリゾーフといふ人が音楽学校でやったのだった。

今考へても立派なものだったと思ふ。その他には、ハインク女史と一緒に来たモルガン氏だが、これは歌数も少ししか聞かなかったし、たいした印象も受けなかった。学生券が売り切れてしまって、渋々三円券を買ったのだったが、今では少しも悔いない。只、自分の音楽としての歌の解釈からすると、氏の歌ひ方は、あまりに言詞の直接的意味に拘り過ぎて居るといふような気がする。自分は音楽の抽象的な味はひを、斯ういふ風に如実に解釈したくない。モジュヒン氏の歌ひ方——ゼスチュアは誠に如実である。自分はあれは暗示以内にとどめて置きたい。何故なら、作曲者自身が恐らくはリードにしても、その言詞の如実的説明を目的として作曲したらうとは思はないから。

作曲者は象徴詩、気分詩としての言詞を、それぞれの音楽的抽象美に結びつけたといふ方が、正しくはあるまいか。それ故自分は、出来上った歌曲が演奏される時に至っては、歌詞の如実の意味は、幾分軽んぜられるといふように超越される方が必然的なように思ふ。却って発音せられる一々の歌詞の微妙な変移、その感触（なめらかさとか弾性とか）こそは、この抽象美を補佐するに重大なものの如くに思はれる。だが今夜のモジュヒン氏に対して、こんなことを云ふのは僭越でもあり、不要でもある。只これは一寸考へたことだから書いたまでである。会場で甘露寺方房、久松定武、小野宮吉に逢ふ。

十月

一日

終日雨が降って寒くて蔭鬱だ。終日閉ちこもって何をしたか。八号に静物ダリアの花を七つ画いた。これは秋庭サンに送る為のものである。

昨日から今日にかけて、ツルゲニエフの煙を読み終へた。丁度一年余前に、私は同じものを英訳で半分以上読んでゐた。で私は不思議な事実にあつた。といふのは、昨年覚束ない英語で辿り辿り読んだ時の方が、より強い印象を与へられたことである。これは、今度が二度目だからではないと私は思ふ。何故なら、私は其後も好きな場合を拾っては何度読んだらう。そしていつもひかれたのである。其の上、この実事を確かめるような解釈を別に私は感じるから。即ち、私は前には丁度、十七八章の処まで読んだのだった。処で今度も丁度其の辺までを前のように読んで、さて終ひまで読んで物足りなかったのである。私は終りの方の十章ばかりに来て、調子が落ちてゐるのではないかと思ふ。事件が事件的に益々切迫してゆくのに、何故か私は反対に幾分でも楽になつてゆくように感じた。「先が見えた!」。その為だらうか、少くともその為ばかりだらうとは

私には思はれない。作者が「むき」になり過ぎた。そして悪いことに、それが作品の上
にまで姿をあらはした！私にはそんな風に思はれるのである。さて進歩派及び保守派の
人々の饒舌。それらの一々は、私のおぼつかない英語では殆どよくわからなかった。そ
れだのに、それらを取りまいてゐる空気を、今度よりも恐らくはっきりと感じてゐたの
は何故か。これは全くわからない。

二日

晴々と霽れ上って、日中は暑いようだった。午後三時頃家を出、麴町に出、神田に出
て買物などして、田辺サンにゆく。夕食を御馳走になって、英サン、国サンと神楽坂を
歩いて、十時前に帰って来る。神楽坂の冬の雑沓を気持ちよく思った。

-
- ✓今日は強き秋日浴びたり 縁近く母が乾させる三つ雨傘
 - ✓縁先ゆ手をさしのべて触れてみる傘はも熱く秋日に焼けたり
 - ✓秋の日の今日強ければ庭先の雨傘三つたちまち乾けり

×

- ✓静かながら今日は明るく晴れにけり隣庭にも傘乾せり見ゆ



花の静物素描画，ダリヤ

三日

○オモチャである

「事実」の前のたわいもないオモチャである
オモチャが夢を見る
オモチャが望む
オモチャが反抗し……………
オモチャが恋をする
これはいかばかりか——
その小さな主観は
主人を少しばかりてこずらせるよりも
自身の苦しみを少しばかり益すばかり
主人はこのもてあますようなオモチャには頗る冷淡で
古くなれば握りつぶし
気にいらなければ踏みつける
更に主人は気まぐれで
時にはとんでもない立派な奴をも
芥屑よりも乱暴に取扱って平気でゐる
さてオモチャは
あはれな主観を意識しよう為に
出来るだけでも主人に反抗したものか
主人に甘へて許された範囲の中に
まあ行きあたりばったりの楽しみでもつかまへたものかと
頭で考へながら
ずるさうな眼で何処かに逃げ出す道……と
オモチャには過ぎたものを諦めきらない

〔×を附す〕

晴天。晩、原瀬の処に行く。江波兄弟も後からやって来る。

「オモチャ」及び「^{くう}空」（一九二三・五・一〇）二篇、日本詩人へ投稿。

四日

昼過ぎ、暫らく雨が降ったけれども、たいしたこともなく止んだので、三時四十分の汽車で鎌倉に来る。又々奥座敷に手を入れて居るので、客間の方の戦地のような雑踏の中に、さわがしい子供達の歓迎を受ける。

✓子等三人八時といふに寝ねたればちらけしまに静もりにけり
✓かしましと思ひしこともかなしかり子等寝ねて後のひしひしさぶし
✓子等いねて静もりみればここあたりとりちらけしがひとしほさぶし
✓子等いねてひしひしさぶし秋の夜はまだ宵とふに遠く犬鳴くも
✓珍らかにわれを迎へてひとしきり勇みし子等よたわいなくねたる

✓い寝ぬると二階に來しが床の上にまじまじさめて海鳴を聞く
✓寝まく思ひ心たむればさらさらに耳べに寄する海鳴る音の

五日 sunday

終日雨が降って退屈する。子供の学校もなく、外にも出られないので、落着くことも出来ない。で叔母が子供達の洋服に刺繍をはじめたので、自分も切を貰って刺繍をはじめると、興にのって夜十時半までも針をはなさない。

六日

終日雨止まず。子供の相手と刺繍より外することを持たない。

七日

雨。

八日

風雨。

✓針止めて日まはりの花百合の花見れども飽かずあが縫ひければ
✓ぬひとりの手もはなたずて虚しごといふもかなしき吾兒ならぬ子に
✓膝もとに遊ぶ子をあはれ吾兒ならぬ子 故にかあらず疎んじにけり
✓ぬひとりの手もと暗ければ針を置きぬ今日五日目の雨暮るとす

✓雨五日五日こもりて子らと遊び子らと遊ぶに やうやく倦みたり

✓ひねもすを雨降り継げばひねもすを小暗き家に茶などすすりけり²⁹⁴⁾

九日

怪しげに雨が止んで暗い日が寒々と冷えたが、午後になってすっかり晴れて日が輝くと、何となく荒れた庭先も、見下ろす松の中のまばらな町も海も「晩秋」の中に浸ってしまふ。葉鶏頭の種をとって、縁先に濡れを乾したりすると、極めて呑気な哀愁が隣りあはせに座ったりして居る。

十日

今日も亦霞んだ眺めである。寒くはないけれども、日の光はなさけなく弱い。庭に出てみたり、家に上ってみたり、そんなにして一日過ぎて了ふ。庭下駄を引かけて、寒いのではないけれども、思ひきり無精たらしくふところ手して、花壇の前をぼんやり見て歩く。盛りを過ぎた葉鶏頭が背高く、下の方は裸になって了って、頭の方だけでもじゃ〜^{〔ママ〕}緋色に燃えて居る。遅れたコスモスが七尺にも余る身丈に、処まんだらに花をつけたけれども、面白くもない。それから築山の裏にまはって、どんぐりの実を五つ六つ拾ってくる。これは子供達の独楽になる。そして珍らしがられたが、明日の朝は忘られて縁側の先どころがされるだらう。それから、椿の木をゆすつては実を拾って、たもとにいっぱいになる。これは小さなママの為に。庭隅に何を間違っか、つつじの花が咲いて居る。まばらではあるけれども、その白い八重花は珍らしい。それに隣りあはせて、秋海棠はもう小花も少なく、沢山重げにたれさがった赤い不思議な実があるが、あまり見のいいものではない。裏庭には交尾期のアンネが長い鎖でつながれて居る。こんなにしたところで、全くいつだってこんな風なのだが、つまりは十匹にもあまる醜い元気のいい子供を生んでしまふのだ。溝のへりには、まだ小さな蟹がうろ〜して居る。玄関先に来てみるが、妙本寺の厨裏はひっそりして、蛇苦死様にお詣りする人のけはひもない。家のまはりを一まはりして、築山の上から海を見ると、灰色に霞んで低い空に続いてしまつて、全く静かである。のっこり家の中に上って来て、又々維摩経を読みはじめる。何のたしになるのかは知らないが、全く解らないなりに、とう〜読み了へる。経の中には、空にして空に非ず、空にして空なり、といふようなことが重ね重ね書いてあったから、多分これでいいのかも知れない。全くのたそがれになって、また〜庭におりたつと、東の山の古松の木に、大きな月がかかって居る。昼間、辰五郎が土を入れかへて植ゑ直した芍薬の木が端葉一枚なく、ごつ〜ひからびて居る。幽かな月の光で、けれども新らしい黒い土が、軟らかにふっくらと盛り上って居る。八時になって子供達がねて了ふと、ママも綾子をねかしながらうと〜して居るので、今度は本当の静けさがや

ってくる。単調な日蓮宗の太鼓の音がするばかりで、時たまに汽車の響と、こもったような汽笛が聞えて来る。女中の声で橋口をうたたねから呼ぶ声がある。それから急に、女中達が転がって笑ひくづれるのが、見えるように聞えて来る。又静かになる。ママが中途はんばなものうい姿で出て来る。

「あゝ、こっちがうと――寝むくなってしまった。」

十一日

誠に意気地なく疲れきったような一日だ。曇り深く鬱陶しい。お昼前にやっとの思ひで外に出る。街に出て、本屋の中をのぞいて見ようとすると、湯地のははさまにお逢ひする。本屋には何にもない。もう一軒と思って雑貨兼本店に入って、少しばかりの本を丹念に見て居るが、さて何もない。明治の末に出版になった袖珍文庫の中の、偽紫田舎源氏の一編を金貳拾五銭で買って、ふところにおしこんで、八幡通りを真直に海辺に出る。浜のさびれ方はひどいものだ。なめり川^{〔滑〕}の外縁はこの間の嵐でひどく水出したのだらう、崖のように砂をさらはれて切立って居る。が川の水はいつもよりもひどく干てしまつて、くるぶしをぬらすばかりで、向ふ側に渡れるようだ。永いこと小高い所に腰を下してみても居たが、目にとまる程のものもない。海岸通を材木座にぬけて帰ってくる。夜に入って又々雨になる。

十二日 sunday

朝まで降って居たらしいが止んで、午には日本晴の美しい天気になる。

十三日

夕方東京に帰って来る。

十四日

用事で太平生命に讓二叔父様を訪ね、序に孝雄サンにも逢って来る。青山にまはって、典範会社にゆき、渋谷に出、歩いて小城サンにゆき、夕食後、保サンと遠山サンにゆき、遅く帰る。

十五日

終日家に居て、あれやこれや手あたり次第に手をつけてみて、一つも続かない。日本晴のすばらしい天気なのに、心は浮かない。九月、十月、一年中で一番悪い月だ。九月はいつもながらのことだが、十月になって、まだこんな風ではしかたがない。

十六日

朝がひどく寒い。十時に家を出て、上野に美術学校にゆき、倉沢を尋ね一緒に倉沢の下宿に行く。丁度其頃から雨が降り出して止みさうにないので、石膏屋と建畠先生の処に行く心算だったのを止めて、日暮里から真直に帰って来る。雨は止んだ。

十七日

夜中に目が覚めると、大変な風だった。夜があけても風は止まず、殆ど終日吹き続けた。雲がすっかり飛んで、昼前には一点の雲も残らない。邦楽座にブレミスラフ氏夫妻の音楽会を聞きにゆく。

曲目

一 コンチェルト ニ長調

アレグロ マエストーソ (パガニニ) ブレミスラフ (ヴァイオリン)

二 (イ) ミニユエット (ベッケル)

(ロ) トロイメライ (シューマン)

(ハ) スケルツォ (ゲーンズ) 夫人 (セロ)

三 (イ) キャプリス・エチュード (カーリー)

(ロ) ゼ・ラーク (チャイコフスキー)

(ハ) ワルス・トリステ (ヴェクセイ)

(ニ) ゼファール (ヒューバイ) ブレミスラフ

四 (イ) ガボット (ポッパー)

(ロ) ヴィートー〈スパニッシュダンス〉(ポッパー) 夫人

五 (イ) ベルスース (グリエール)

(ロ) ヴァルツェル (ウェーベル) ブレミスラフ、夫人

恐らくは、震災後はじめて聞きたいヴァイオリンだったかしらん。何処にもしゃれ気のない、縁をとった黒い服の彼、頭の頂が大きく禿げた、恵まれた額をてかへと光らせて居る彼。一見^{〔素〕}粗朴な^{〔ママ〕}百性を思はせるような彼、から、そして其の演奏から、殊に私は露西亞——それは莫然^{〔漠〕}たる——的なものを受取った。第一のコンチェルトは美しいものだった。鮮かなフラジオレットは、耳の底に残る。又極めて軟らかいダヴル・ストップが。音はあまり大きくない。強い処もありない。第三の小曲は皆、技巧的なもので、非常によかったとは言へないかも知れない。が、アンコールに奏かれたエヤーは、追にありあまる余祐^{〔裕〕}から、極めて豊かに奏かれた。夫人は反対に、美しい顔に美しいギラへと光る玉をつけた青い服を着飾って居る。夫人は、恐らくは一段も或は二段も落ちるかもしれない。それにもかかはらず、私は夫人の演奏を興味深く聞いたのは、二三

年前の夏、高勇吉が毎日番町の家に来ては練習して居た数曲、私が今もその細かい処までおぼえて居る数曲を、まるで殊に撰ばれたかのように奏されたからだった。其上夫人の肩から露はに^{〔さか〕}出たれた白い美しい腕とその美しい動きとが、蓄音機からは聞かれない音楽を、目から聞かせたとでも譬へられるように、私の印象に刻まれて居る。終に奏かれた合奏は、幾らか物足りない。夫人との平衡からブレミスラフ氏自身のヴァイオリンが、調子を下して居るかのように見える。いい音楽会だった。

会場で、小野宮吉、江波、中井の良サン、きみちゃん、ふみちゃん等に会ふ。帰りに神田にまはって、カンバスを買って帰る。

十八日

朝のうち曇って居たが、昼からは秋らしい日が明るい。朝から十号静物を書き出したら、江波と原瀬がやって来る。話しながら画き続けると、保ちゃんと惣ちゃんが来る。そして、明日ピクニックをするからと言ってくる。自分は困る。昨日良サンに断はったばかりだったし——それなのに、色々の事状が自分に行くように決めてしまふ。で、夕方皆と一緒に家を出て、上原サンの子供達をさそひにゆく。行ってくれるらしい。帰ったら譲二叔父様が来て居られる。自分は計画となりゆきと、不可解な結果の渦巻の中にまきこまれてしまふ。

十九日

雨が降って居る。ありがたい。^{〔新宿〕}宿新に兎も角も行くつもりで家を出たが、考へ直して帰ってくると、石膏屋が来てくれた。益々ありがたい。午後、築地の「詩人の日」にゆく。詩人の自作自唱会で、出演者は次の諸氏。中田信子氏、尾崎喜八氏、福田正夫氏、佐藤惣之助氏、竹友藻風氏、深尾須磨子氏、秋田雨雀氏、川路柳虹氏、島崎藤村氏、白鳥省吾氏、野口雨情氏、与謝野晶子氏、与謝野寛氏、富田碎花氏、野口米次郎氏。

二十日

昨日、譲二叔父様が見えたさうで、又々お墓に行かねばならない。朝から曇って居たが、どうやらもちこたへてゐるが、お墓に何にもしないで人足の仕事を見て居ると、体中が冷たくなった。そのまま築地の劇場にゆく。昨日「詩人の日」から居残って二幕まで見たので、今日は^{〔閑〕}玄間を手伝って終の二幕を見る。「どん底」(夜の宿²⁹⁵⁾)だが——何年か前に、研究座の同じものを見たのだが——だが。

二十一日

終日吹き降りて寒い。終日家に居て何にもしない。尤もピランデロの「作者を探して居る六人の登場人物」を読んだのだが——俺はこの一ヶ月の間、馬鹿のような俺だ。八

時には寝てしまふ。

二十二日

雨は止まない。其上悪いことに、風はやんでしまって、眺めは一層蔭鬱だ。死にさうなこほろぎの聲が止まなくザーザー言っている。読みかけたり止めたり。けれどもとうへトルレルの「群衆人間」及ビマリネッティの「電気人形」を読み終へる。

二十六日 sunday

日本晴といふところ。縁側で日向ぼっこ。だが元気がある訳もない。今しがた朝からお玉様が見えて、さっさと帰って行かれた。まあ二三日前のことから思ひ出すか。二十三日には、雨もどうやら止んだので、築地に行く。咽喉をいためて居るので、早く帰ってくる。二十四日も晴れた。朝小石川へ行つて、ゲーテとシェイクスピアのマスクを持って石膏屋に行く。江波を尋ね、一まづ家に帰つて、夕方築地に行く。夜がひどく冷えたので、咽喉は益々いけない。苦しい咳が出る。煙草がまづい。二十五日、朝から帝展見物。彫刻と西画と、人の名と画と見くらべただけで労れてしまふ。午後音楽学校の演奏会にゆく。ひどい。最初の会員合唱、ブラームスの「秋に」は、何ともない。音川仙三のリーディングのコンチェルティノはひどいものだ。ソプラノ、佐藤美子はうまい。が少しでもうまくなったとは云へない。文ちゃんのピアノはまづ無難だった。君ちゃんと二人でいやしづへ出て来るので、滑稽な気がしないではなかった。ファウスツの中の三重唱もよくない。鳥居忠五郎、内田栄一、気持のいところが少しもない。小代のは、声が小さいけれども気持がいい。林良輝のジットのコンチェルティノは、ボーイングがまるでひどい。スタッカートを自信がないので、わざときらないのだと思つたら、兄は確かにきつて居たと云ふ。きつて居たのに切れて居なかつたといふ。それぢや尚わるい。岡見幾久子のソプラノの間、咳をこらえるのに骨を折つてよくも聞かなかつたが、今日のうちではいい。最後のソプラノ及バリトン独唱附合唱が、まづよかったといつておく。苦しいので、夜は早く寝てしまふ。九月から、殊に十月の間、馬鹿のような自分だった。半分はお天気が悪つたのだと云へる。

○九月も過ぎて

秋が漸く深くなってゆくのに
毎日毎日花時のような怪しげな空から
細かい雨が降ったり止んだりして居る
萩の小花に
秋らしい日が照るのも見ない

さて私は永いこと
より高いものに立衝いて来た
より賤しいものに虐げられて来た
そしてこのごろふと思ふ
「私は罪を負って居るのだ」

ひとが寝る時に寝ないのは罪だ
尚いふならば喜ばない心は罪だ
これは説明だ
だが――
罪は報ひではない
罪は宿命を越えた性格だ

私はこの罪によって今を怒り
昨日を悔やんだ
そして更に明日をあやぶむ心が
此の罪を二重に育て上げる

漸くしてここに
私といふ永劫の性格が築かれた
消すことは出来ない
更に捨てることに何うして堪えようか

罪だ！
私は日一日と深く
此の罪の中にひとの知らないものを嘗め
ひとの知らないものを夢みる
……………ほほゑむ

今こそ
秋よ、雨よ、或は外^{そと}なる悪魔よ
お前達の思ひのままだ
道はぬかるむだらう
花は凋れるだらう

だが私は――

苦楽を越えて楽しんで居る

悲喜を越えてほほゑんで居る……

〔×を附す〕

~~~~~

快晴。皆が出て行くので、自分は家に独り残って居る。

夕方築地へ行く。ピランデルロの「作者を探す六人の登場人物<sup>296)</sup>」だ。小石川へ行って宿る。

二十七日

午頃、家に帰る。夜築地へ。

二十八日

寒く曇って居たが、午後になって遂に降り出して、益々寒い。ひどく降ったが、晩には止んだらしい。

---

○夢のような日が続きました

長い長いことのような

ほんのつまらない一時のような

ふりかへって見ると其処には何にもない

少くとも私が其の中に生きて居たとは何うしても思へません

毎日毎日雨が降りました

桐の葉が黒くなって、蝕んで

腐って落ちるのを私は見ました

だから私は毎日ぶつゝ怒って

葉葉のように青くなって、苛々して

さて私は何を考へたことでせう

私は目に何にも見ませんでした

それは夜の闇よりも暗かったのですから

私は耳に何にも聞きませんでした

それはさながら墓場の沈黙だったからです

そして私の心は譬へば止まった時計か

喜びもしませんし悔みもしません

云はば生きながら死んだようなものでした

ですが生きるといふことは恐ろしい力です  
私は生きてゐたのです  
だから私は生きたかったのです  
だから私は毎日ぶつゝ怒って  
葉葉のように青くなって、苛々して  
云はば生きながら死んだものの  
喜もない悔もない  
虚の底に  
私自身さへしらないあてを<sup>・</sup>あて<sup>・</sup>にして<sup>・</sup>  
(あゝ、命とは機械のようなものでした)  
さて私は夢中で死を拒んだのでした

[×を附す]

二十九日

晴，暖。午後，上原サンに寄って，動坂に石膏屋を尋ねたが，留守。夕方帰ると間もなく，江波と原瀬が絵具箱を下げてやって来る。

三十日

晴，風烈し。

三十一日

終日曇って居る。早過ぎて，八時半前には独り両国駅について居た。九時までとうへ誰もやって来ない。其のうちに，兄と惣ちゃんと保ちゃんが来る。通ちゃんも，磯ちゃんも連れて居ない。通ちゃんが来ないので，磯ちゃんも途中から帰ったとの事。それから江波がすぐ次の弟と二人で来る。珍らしいことだ。小子供は学校に式があるので来ないと。

それから，原瀬が宮田をひっぱって来る。石崎氏の連中は欠席と。さて野郎共ばかり茲に八人集って，聊か心細くないこともない。けれども斯うなれば，なまじひ女子供の一人ぼっち来なかったのが幸ではある。九時三十五分の汽車で市川へ。たわいない話のうちに，総寧寺<sup>297)</sup>(?)の庭をぬけて国府台に出ると，ここは茶屋が多くていけない。渡を渡って，落葉の桜堤に出ると，広々として気もちがいい。ようやく堅くなった草の上に車陣が出来ると，弁当が開かれる。スープが熱くなる。酒が爛される。サンドウィッチ，菓子，果物，葡萄酒。話が飛ぶ，笑ひが跳ねる。二時に国府台に帰って一休。練兵場<sup>298)</sup>で又休。電車で押上に出，浅草まで歩くと労れる。浅草で寿司をつまんで，大拳江波の処におさまる。与駄，蓄音器，だれ。十時半に家に帰る。

## 十一月

## 一日

終日曇って気が晴れない。珍らしく九時半近くになって起き出たが、面白くない。午後には又々毛布をかぶって寝てしまふ。夕飯まで寝通して、起きると雨が降ってくる。夜は寝られない。床の中で、醒めたりまどろんだりして、雨がいくらか静かになったり烈しくなったりするのを知って居る。あけ方までに、幾つとなく、全く関連しない気持ちの悪い夢を見る。

## 二日 Sunday

早く起きて、八時半には新宿の駅に行って居る。またまた誰もなかへやって来ない。自分の馬鹿正直を耻づかしく思ふうちに、九時にやと保ちゃん<sup>〔小城〕</sup>、良サン<sup>〔中井〕</sup>、惣ちゃん<sup>〔中井〕</sup>、通ちゃん<sup>〔小城〕</sup>、増子サン<sup>〔小城〕</sup>が集まる。それっきり誰も来ない。十時になって、やとと電車に乗る。笹塚で後藤が子供達をつれて乗ると思ったが、これもこない。国領で下車して一時間近くも待って、誰も新たな人を得ないで、けれども天気はすばらしく明るく閑かなので、明るい心で十二時に玉翠園につく、と空が僅かに真暗になって、雷と一緒に大粒の雨が降ってくる。で、亭に入って御馳走をひろげて、ウィスキーを飲んでお腹も出来、気もたるんだ頃に雨が止んで、暖かい日が輝き出た。そして、兄と文ちゃん<sup>〔小城〕</sup>と磯ちゃん<sup>〔村松〕</sup>が来る。一休の後、随分風は烈しくなったが、河原に出て思ひへ〜のことをして居るうちに、花形、遠山のオヂサンが後れ馳せに來られたので、弛みかけた心がよりをしめる。それから河原に火を焚いて、鳥の丸焼が焼かれる。それに、日本酒のお燗で再び腹が肥やされる。五時には暮れかかるので、ぼつへ〜後仕末<sup>〔始〕</sup>をして、風の中を歌を唱ひ、フットボール蹴って、国領に帰ってくる。

## 三日

晴。閑か。

「白日疑忌」(一九二四.八.八) 日本詩人へ投稿。

昨日留守に三沢が尋ねて呉れたので、夕食後、三沢を訪ねたが、留守。大久保の町を少し歩いて帰ると、間もなく江波と原瀬が来る。

〔欄外に記す〕  
〔返信〕

○御手紙拝受 (二信——返信続——が十二月十三日に記される)

信州に遊ばれし由

信州に遊んでつまらなかった由

否、空っぽの日を過されし由  
ところであなたは  
空っぽの日を大変にお悔やみですが  
丁度私は此の頃に  
そんな空っぽの日を迎えて送って  
さてなかへーいいように思っていますよ  
これは逆説でも皮肉でもないのです  
全く私の空っぽの日は  
此の頃の日差のように閑かです  
手ぶらです  
しなければならないこと  
いつまでに何処へ行って、何をして……  
さういう一切のことが絶無なのです  
(しなければならない気がしないし  
しようとする心がないのです)  
それで退屈しないかとお尋ねならば  
それこそ恐らくあなたの使った  
あなたの過ごされた空っぽになって了ふのです  
これは——真の空っぽは  
在有の一つの形式ではありません  
まことの空っぽは現在でない  
過去でもない、未来でもない  
だから恐らくはふり返ってみることもなければ  
悔いることもない  
秋日の縁側はほかへーと暖かく  
虻が飛び  
百舌鳥の声が聞えます  
だがそれは瞬時の現象でなく  
永遠の在有でもない  
それは直ちに  
云はば空っぽの色でもあり匂ひでもあるのです  
(仮象として蔑むものではありません  
幻想として遂ふものではありません)  
ですから君  
恐ろしく高い望みに慄く君よ

不可思議な結果を悲しむ君よ  
(結果は見えて居たかも知れない  
  少くとも恐れて居たものかも知れない)  
  勞れたといふ君よ  
  ぢれったいといふ君よ  
(それがあなたの感傷主義に因るのなら  
  或はあなたの享樂主義に因るのなら  
  私は無駄者より外ではないでせう)  
どうか一度遊びに来て下さい  
恐らくは私の為よりもあなたの為に  
朝から晩まで居るつもりで  
ゆっくり遊びに来て下さい  
日向ぼっこでもして  
お茶でもすすって  
用もないことを喋って  
お風呂から上ったような気のおけない心になってみませんか

〔×を附す〕

四日

五日

朝、三沢を尋ねると、既に学校へ行ったとのこと。で学校に行って逢ふ。久々に小室に逢って一緒に帝展を見る。

最近著しく自然主義的傾向から遠ざかって居る自分には、帝展にあるこれらの自然主義的作品の——否、総括された自然主義の中の区々及びその上下が、どうもはっきりしない。どれもこれも、僅かなものをのぞいては、うまいと思ふ。(これは自分の過去の<sup>〔ママ〕</sup>懷顧から来る同情かも知れない) そのくせどうも興味が持てない。僅かに興味をつなぐものは、詩的なもの——文学的表現ではない。例へば説明的なポーズ或は表情を以て訴へたり、強ひたりするものではない。例へば小倉右一郎氏の「独流の中」などは、自分が唾したいものである。——及び個々の要素(線、面、蔭影、殊にコンポジション)的なものが、それらの自然主義的外観の中に、盛に活躍して居るようなものである。けれどもさうしたものは又、誠に少ないので、結局物足りない感じが大きい。先づ彫刻部から大ざっぱな印象をしるして行く。小室の「曙光」は、今年の特選第一位だけあって、場内で光って居るものの一つだ。コンポジションもいい。手法にも一貫したものがある。全体的にも裸体以上のものが出て居る。モデルも大変にいい。

モデルで思ひあたるのは、場内に盛に目につく醜態である。即ち自然主義も対象を乗

り越えて自然を駆使するようになればいいが、自然主義に引摺られて居るような作品にぶつかることだ。外面的な云はば引うつしに止まって、作者が何処にも働きかけて居ないものが、或はそれに近いものが随分と多く見当ることだ。

一体日本人の体格は、プロポーションもまづいし、総体に立体ではない。だからこれらの引写しに止まるようなものだ、実に見て居て悲惨な気持になる。

---

丁度学校に黒田清輝子の遺作展覧会があったので、午後一覽する。世界が遠く異るのは当然として、努力、精進には敬服すべきものがある。またよくこれだけ集まったと思ひ、偶然これを見ることの出来たのは嬉しい。

六日

帝展彫刻続き。

津田真瑞氏の「泉」は、おっとりした感じのいい作だ。好きだ。諏訪頼雄氏の「旋律を追ひて」は、この題を気にしないと、先づ面白味のある方だらう。

小倉武生氏の「粧ひ」は、先づ引写し以上でない。モデルが堂々として居るから、あまり目立って裸体の醜さを見せないが、悪いことに、甘ったれた、最も低い意味でのセンチメンタリズム、極めて安っぽい趣味だけが残る。

朝倉文雄<sup>〔夫〕</sup>氏の「砲丸」は、此の種の行方としては、一点の非を打たうとは思はない。望む方が無理かも知れないが、現代的なセンシブルな所がない。これはあながちにけなす意味でなく、二時代前のすなほな自然主義の大成だ。

安藤照氏の「相」。自分の観る所では、氏は物を大きく大きく見てゆくと云った道を進んで来た人だ。是を外面的に見ると、シムプリフィケーションだ。自分は此の「相」を見て、こんな風に思ふ。氏は、シムプリシティーの徹底を目ざした。徹底といふことは恐ろしいことだ。シムプリシティーの徹底する所は、単なる一面だ、或は更に「無」にまで続くのかも知れない。そうして氏は、この理想と現実との板ばさみになって了ったのではあるまいか。

大国貞蔵氏「大空の下に」。いつもながら此の人の作は嫌ひだ。下品だ。あまりいつもながらなので、此節は、自分に全く反対する何かを持って居るといふような気がして居る。

堀進二氏の「秋」。自分が場内で最も好きなものの一つである。

小倉右一郎氏「婦」。小倉武生氏と同じものだ。右一郎氏は、彫刻界の大家だ。恐らく武生氏の方が引摺られたのかも知れない。

小笠原貞弘氏「煉獄」。新聞で見ると、これはダンテの神曲からヒントを得られたのださうだが、宛ら自分達の「煉獄」に対する概念に、モデリングして見せて呉れたよう

に思はれる。自分は此の種の特種な動機から生れるものを、あながち退けるものではない。先づ此の位に「煉獄」そのものを抽象的に扱ってくれば。而も、尚何処かで此の作を、無題でながめたいような気がして居る。

<sup>〔兄島〕</sup>小嶋矩一氏の「勝利の後」。<sup>〔ノ〕</sup>此の題と此の作風とを見ると、誰でも斯んな風に思ふだらう。<sup>〔兄島〕</sup>小島氏は、色んな意味で、いい気になって了って居ると。

都賀田勇馬氏「日本の牛」。よく見ると、目立たない処に苦心の見える作だ。観察にも表現にも、余程の研究があったことと思はれる。殊に、顔のあたりなどは、実にうまいものだ。が、これだけ大きくなければ、何うしていけないのか、といふより、これだけ大きくした為に、どれだけの効果があったかを疑はずに居られない。或は一つには、会場がせま過ぎる為<sup>〔ママ〕</sup>もあらが、何うしても一日に入って来ない。これが少くとも、丁度一日に入って来る位の大きさであったならば、此のどっしりしたマッスの感じが、余程強く迫って来るだらうにと思はれる。序ながら（この牛に全然気のつかないでしまった人がかなりあった）と、友達が自分に話した。荻島安二氏「胸像」。可憐な少女が、夢の国の少女が、自身とは全くかけはなれた、とんでもない力づくの世界へつき出されて弱々しく怯へ、更にこの現実の世界の醜さに眉をひそめて居る。早く此の少女の<sup>〔ママ〕</sup>安神して遊び、楽しみ、眠れる世界へつれてかへってやり度い。佐々木大樹氏と小倉右一郎氏の間に居てはたまらない。両側の二つが、このデリカシイを何と見るか、極めて皮肉な偶然である。

さて、後を簡単にするとして——實際あまり同情出来ないものを、親切づくで見ると堪へないから——拙劣嫌ひなものとして、三好貴久丸氏の「想」。金子久次郎氏の「陽春」。小島南海氏の「過去は夢」。松平栄之助氏「涼風」。<sup>〔喜一郎〕</sup>泉谷喜郎氏の「惶」。杉本三郎氏の「兄の像」などなど。吉田芳明氏の「行雲」は、あれだけの刀法を持って居て、まるで勢がないのは、何故か。

加藤鬼頭太氏の「若き女」は、どことはないが、好きな作だ。

も一つ、田村審火氏の「青春の誇り」は、今迄の帝展には極めて少ないもので、再現を遠くはなれたものだが、此の人は、或種のマンナーを持って居る。自分としては、座った方の女の左脚のおさめ方に必然性が欠けて居ると思はれる。何うにかしたい。此の人の、再現をはなれたとは云へ、ネグロイズムのような興味中心なものでもなく、未来派的のデイスハーモニイ乃至破綻それ自身をも主張するのでなくて、どちらかと云へば、理智的なコンポジショナルなものであるから、此の下部の方の気まぐれ乃至思ひつきのように見えるのが、どうも気になる。

---

午前半日は、ぽかー暖かったが、午後は曇りがちで寒い。夜一寸築地に行って来る。

七日

朝のうち、帝展を見て来る。彫刻を見て、西画を見て、ひょっと日本画の六室に入った。  
堂本印象氏の「乳の願ひ」を大変いいと思ったら、お隣の広島見浦<sup>〔甫〕</sup>氏の「落葉の丘」も、  
可憐なすなほな心を持って居る。更に市原寿一氏の「扇売り」を見ては、無条件に美しいと思った。こんな世界のあったことを自分は全く久しく忘れて居た。

夜、お玉様が来られる。

---

○私は信仰を持って居た

それは美しい信仰だった

それはすなほな信仰だった

やがて（それは運命だった）

私は強ひられた犠牲と共に

その信仰をもかなぐりすてて

自由だ、自由だと思った

（だがそれは自由の概念に過ぎなかった）

（人は何故何ものをか持たねば

望まねば止まないのか）

私は意味を求めた

だが（それは運命だった）

私は限ない分裂へと急がねばならなかった

意味とは何か？

因って存在する理由である

意味とは何か？

因って存在する目的である

（いけない！

それは卑劣な自己弁解だ

偽善だ

安っぽいセンチメンタリズムだ<sup>〔ママ〕</sup>）

意味とは何だ

価値だ

(有難い) 価値だ!

(あゝ、落ちかけた水は止まらない)

価値とは何だ

価値は価値だ

価値は本体だ、至上だ、絶対だ

更に価値とは何だ

価値は存在を高めるか

価値は幸福を齎らすか

(悪魔め!)

さうだ、価値は幸福を齎らさねばならない

<sup>そは</sup>蓋、私は生きて居る

死、(全くだ!)

意味が、価値が、幸福が、主観であり想であったところで

存在が、現実が、現象であり理由ない客体であったところで……

意味とは何だ

価値とは何だ

幸福とは何だ

——生きなければならぬ

おゝ、生きたい!

所詮、空が無が絶対<sup>[ママ]</sup>でならば

主観と客体とは色であり綾であり匂ひであるならば

人生はそれ自身の本質として最も多角的に粉飾せられねばならない

人生は享樂せられねばならない

人生は楽しまれねばならない

悲しまれねばならない

苦しまれねば

更に動揺せられ攪乱せられ

更に複雑<sup>[複]</sup>に多彩に

喜ばれ又呪はれねばならない

そうして (これが運命なのか)

私は生きなければならない  
私は生きたい！

八日

晴天。凜めいて風がはげしく吹いたが、まだそんなに冷たくはない。  
あまり石膏屋が来てくれないので、——其上、鎌倉から、明日直矢叔父様の一年祭をするからといって来たので、午後、動坂まで行って来る。留守なので、ゲーテ、シルレル、シェイクスピアのマスクを受取って築地に行く。「恋愛三昧<sup>299)</sup>」(シュニツラー)をのぞいたが、面白くない。  
帰って見ると、自分の留守に石膏屋が尋てくれたことがわかった。

[5 頁白紙]

〔裏表紙裏面〕  
〔東京府下杉並町高円寺六一九〕